70th Anniversary

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会

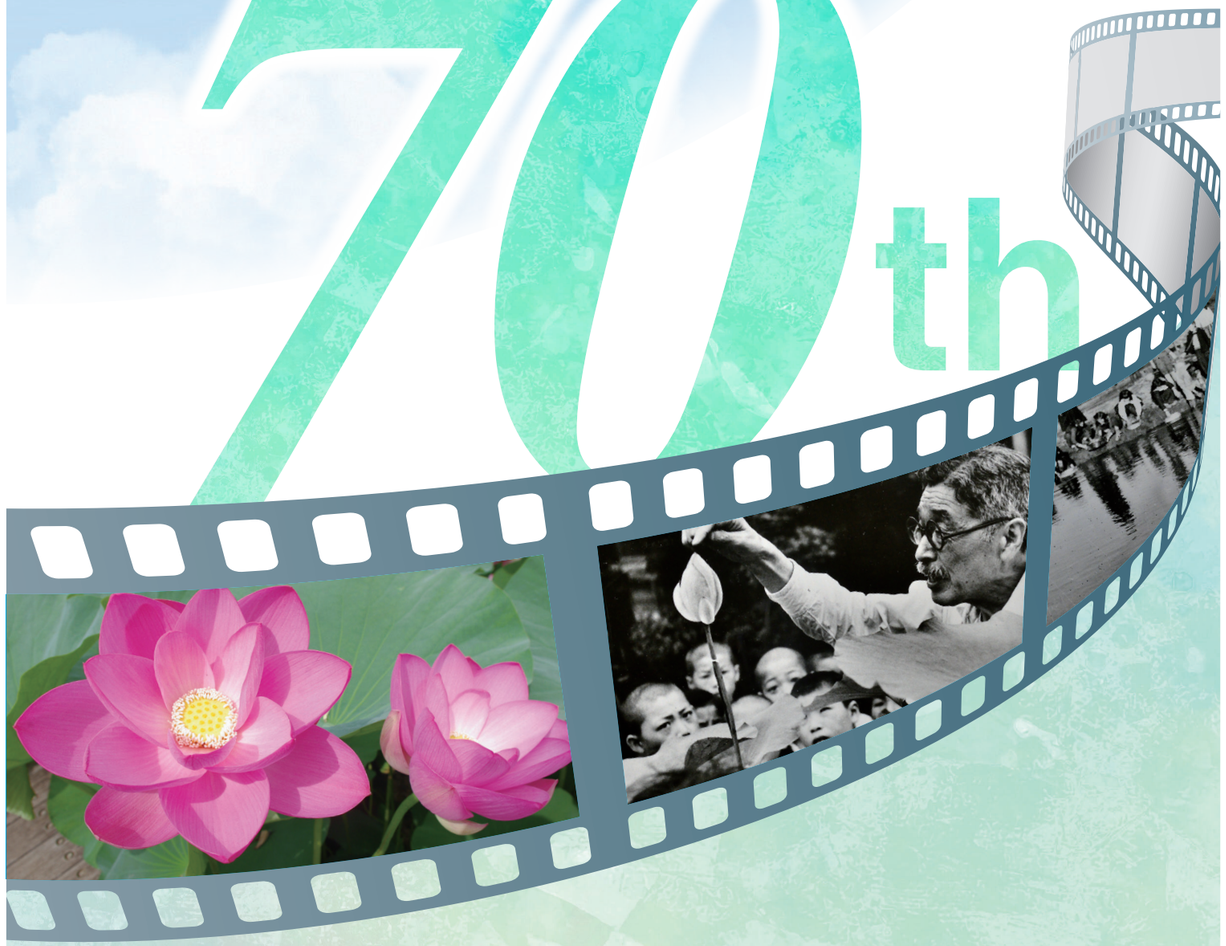
大賀ハス開花70周年記念誌

大賀ハス開花70周年記念誌

大賀ハス開花 70周年記念誌

To be continued...

70th



大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会

大賀ハス
開花70周年
記念誌

Ohga Lotus

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会

目次

ごあいさつ

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員長　仙波 慶子 …… 3
大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会名誉会長／千葉市長　神谷 俊一 …… 4
70年のあゆみ …… 5

第１章
時を超え、情熱が咲かせた奇跡の花 …… 11
1 古蓮実の発見 …… 12
2 古蓮実の発芽と生長 …… 15
3 古ハスの開花 …… 17
4 古ハスの命名と古蓮実の年代 …… 19
5 平和と友好の使者 …… 21
6 発掘碑と大賀博士育英会 …… 23
7 大賀一郎略年譜 …… 25

第２章
オオガハスを活かしたまちづくり …… 27
1 千葉市におけるオオガハスの歩み（略年表） …… 28
2 市内のオオガハス栽培 …… 30
3 国際花と緑の博覧会とオオガハス …… 32
4 市の花オオガハスとちはなちゃんの制定 …… 33
5 観蓮会とハスまつり …… 34
6 開花60周年 …… 36
7 都市アイデンティティと市政100周年 …… 38

第３章
大賀ハス開花70周年記念事業 …… 41
1 記念フォーラム
（1）記念講演「万葉の花」
（元 NHK 理事待遇アナウンサー　加賀美 幸子氏） …… 42
（2）基調講演「古代蓮の中の大賀ハス」
（元京都府立植物園園長　金子 明雄氏） …… 48
（3）パネルディスカッション「オオガハスを活かしたまちづくり」 …… 54
2 記念パネル展「大賀ハス70年の歩み」 …… 61
3 認証事業 …… 62

特別寄稿～開花70周年に寄せて
（1）神秘さに魅せられ半世紀～オオガハスの系統保存に努める
（蓮文化研究会顧問　南 定雄） …… 64
（2）父と大賀ハス　その後（和歌山大賀ハス保存会　阪本 尚生） …… 67

資料編 …… 70
全国オオガハス生育場所一覧 …… 70
大賀ハス開花 70 周年記念フォーラム　アンケート集計 …… 73

編集後記

「おおがはす」の表記について

本稿では、千葉市の花及び学術的名称の場合は「オオガハス」と表記し、イベントなどで使用する場合は、親しみやすさ等を考慮して「大賀ハス」と表記しました。なお、千葉県の天然記念物としては、「検見川の大賀蓮」で指定されています。

ごあいさつ

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員長
仙波 慶子

千葉市の花であるオオガハスの開花70周年記念事業のひとつとして、この「大賀ハス開花70周年記念誌」を刊行いたしました。2000年の眠りから覚めた、1粒の古代のハスの実が開花するまでの奇跡の物語とその花を大切に育み、守り伝えてきた研究者や地域の人々の熱い思いに改めて感銘を受けました。

昭和26（1951）年、植物学者の大賀一郎博士らが千葉市花見川区の現・東京大学検見川総合運動場の地層から３粒の古代のハスの実を発掘。翌年の昭和27（1952）年にそのうちの1粒が大輪の花を咲かせました。大賀博士にちなみ「オオガハス」と命名されました。その後、千葉公園にも分根され毎年、淡紅色の優美な花を咲かせています。開花70周年の年にあたる、昨年6月30日には過去最高の940輪が園内のハス池で開花しました。

千葉公園ではかつて「千葉はすの会」という観覧会が開かれていました。そして、平成20（2008）年からは花びと会ちばによる「オオガハスの観察会」として、平成22（2010）年から「大賀ハスを観（み）る会」として7月に開催してきました。オオガハスが千葉市都市アイデンティティを形成する４つの地域資源の一つに位置付けられたことで平成28（2016）年より「大賀ハスまつり」として９日間となり、千葉市の花として多く人々に周知されるようになりました。

「大賀ハスまつり」の期間中の6月に開催された「開花70周年記念フォーラム」は千葉市のアイデンティティとしての見地からオオガハスの歴史・文化的価値を発信しました。学術的な基調講演、国内外の約250か所に分根されたオオガハスがつなぐ都市交流・まちづくり関連のパネルディスカッションなど意義深いものとなりました。また、記念講演では元NHK理事待遇アナウンサーの加賀美幸子さんが万葉集の中で詠まれたハスの和歌を紹介されました。オオガハス研究者や保存会のご支援を得て開花70周年記念誌の形にまとまりました。この記念誌が多くの皆様の目にとまり、オオガハスの魅力や取組み、先人のご尽力が伝わることを願っております。開花80周年に向け、オオガハスが千葉市の宝としてまちづくりの活性化の一助になることを願っております。最後に、未熟な実行委員長を支えてくださった実行委員の皆様、事務局である緑と花の推進室の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

ご あ い さ つ

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会
名誉会長

千葉市長　神谷俊一

大賀ハス開花70周年記念誌の発刊にあたり、ご挨拶を申し上げます。

昭和20（1945）年の空襲で千葉駅などの中心市街地の大半が焼け野原になり心身も傷ついた人々に、全世界へと発信されるほど明るい大ニュースが飛び込んできたのが、昭和27（1952）年の「オオガハス」の開花でした。

ハス研究に一生を捧げた植物学者の大賀（オオガ）一郎博士は、昭和26（1951）年に市内の東京大学検見川厚生農場で、大勢の有志のもと約1か月に及ぶ悪戦苦闘の末、泥炭層から3個の古代ハスの実を発掘しました。これらの実の発芽を試みたところ、３つのハス根まで成長し、そのうちの１つが翌年の昭和27（1952）年に約2000年ぶりに花を咲かせるという歴史的な快挙を成し遂げました。そして、千葉公園に分根された株は、昭和28(1953)年に初めて４個の大輪を咲かせました。

その後、初夏の大空へ舞う優美な「オオガハス」を風流に愛でる「千葉はすの会」が、現在の「大賀ハスまつり」の原点として昭和31（1956）年から始まりました。この「千葉はすの会」は、東京大学旧緑地植物実験所内の花園ハス祭り「観蓮会」とともに、夏の風物詩として定着しました。

また、オオガハス開花35周年を記念し、オオガハスの由来や維持管理、国内外への分根などをまとめた貴重な小冊子が昭和63（1988）年に発刊され、オオガハス研究の基礎が固められました。

それからさらに35年の歳月が流れ、令和４（2022）年に開花70周年を迎えられたことは、先人達がたゆまぬ努力を重ねた財産であり、改めてその功績に深く敬意を表します。

この35年の間には、千葉公園のハス池やオオガハスをモチーフとした蓮華亭が完成したほか、平成5（1993）年には前年の政令指定都市移行を記念して、オオガハスが「市の花」に制定されました。また、平成24（2012）年からオオガハスの純粋な種を後世に継承する「系統保存」に取り組み始め、平成28（2016）年には、市のアイデンティティとなる「４つの地域資源」の１つに数えられるなど、市民の間ではますますその存在感が大きくなっています。

世界最古の花「オオガハス」が後世への大きな贈り物として引き継がれるよう、70年間の活動記録として発刊する本誌が、開花80周年に向けて多くの支援者の拠り所になることを期待します。

最後になりますが、本誌の発刊にあたり、多大なるご協力をいただいた「大賀ハス開花70周年記念実行委員会」の関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

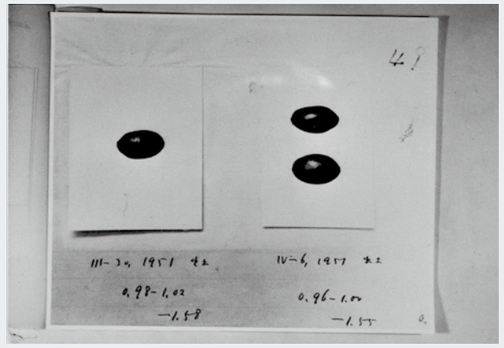
令和５（2023）年３月

70年のあゆみ

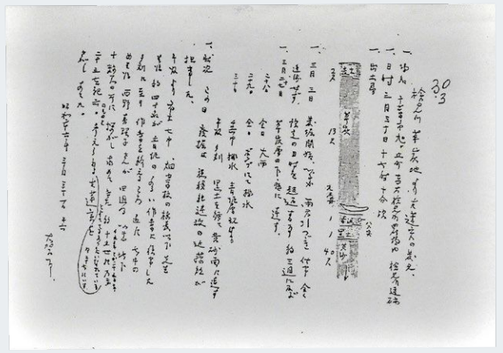
1. 古蓮実の発見・発掘風景・開花

泥をふるう子供たち

土留めをしての掘削



発掘された3粒の古蓮実



大賀一郎博士のメモ

開花したオオガハス

2. 大賀 一郎博士

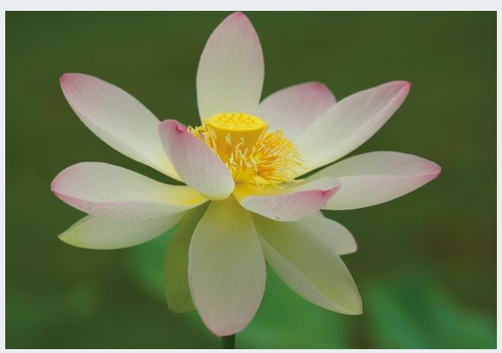
開花２日目の花を愛でる大賀博士

大賀博士と伊原茂氏

海外でも紹介された大賀博士

3. オオガハスの仲間

中日友誼蓮（ちゅうにちゆうぎれん）



舞妃蓮（まいひれん）

4. 普及・啓発

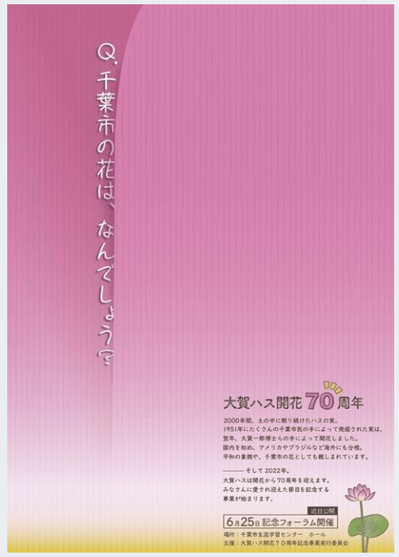
国際花と緑の博覧会に出展（平成2(1990)年）

成田空港に建設された「蓮の和風庭園」（平成27(2015)年）

千葉市立郷土博物館のオオガハスに関する展示

5. 開花70周年記念事業

ポストラッピング



大賀ハス開花 70周年記念ポスター

特設サイトの開設

記念フォーラムの開催

ちはなちゃんのお誕生日会

ワークショップの開催

記念切手（日本郵便協力）

ダイカット（型抜き）カード
（日本郵便協力）

大賀ハス開花70周年記念　ロゴマーク

大賀ハスまつり（象鼻杯）

大賀ハスまつり（太鼓の演奏）

認証事業（ちば産学官連携プラットフォーム）
モザイクアート 1

認証事業（ちば産学官連携プラットフォーム）
モザイクアート 2

第 1 章

時を超え、
情熱が咲かせた奇跡の花

第1章 時を超え、情熱が咲かせた奇跡の花

1 古蓮実の発見

(1)大賀博士が発掘に至った経緯

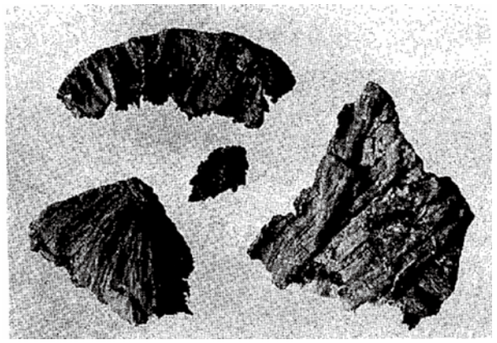
明治42（1909）年東京大学植物科を卒業した大賀一郎博士は、大正6（1917）年南満州鉄道㈱に入社し中国の大連へ赴任します。この地で南満州フランテン出土の古蓮実（推定1000年前）の発芽研究に努めました。

大正12（1923）年に渡米して、ジョンズ・ホプキンス大学やボイス・トムソン植物研究所でフランテンの古蓮実の発芽に成功します。昭和2（1927）年、この時の「古蓮の果実の研究」により東京大学から理学博士を授与されます。この頃、「植物の種子中、ハスの実は生命の長いもので2500年は生存する」と大賀博士は予言しています。

昭和7(1932)年香取郡滑川町（現成田市）の河川工事で、須恵器（陶質土器）に一杯入った古蓮実（推定1200年前）が出土されますが、1個を残して他は捨てられてしまいます。昭和25（1950）年大賀博士の友人、国学院大学の考古学者・大場磐雄（いわお）博士から、この古蓮実を1個もらい受けます。大賀博士は発芽に成功し「私は25年前の予言を図らずも私の生涯中に見たのである。この瞬間私は端座瞑目（たんざめいもく）実に感涙滂沱（かんるいぼうだ）たるものがあった。」と記しています。

古蓮は発芽50日目に浮葉5枚になるまで生長しましたが、古蓮の管理を任せた助手の施肥の失敗により枯れてしまったのです。この時の大賀博士の落胆は大変なもので、平常に戻るのに3日を要したそうです。

落合遺跡出土の丸木舟


落合遺跡出土のハスの果托

失意の中、大賀博士は井の頭自然文化園に陳列されていた「落合遺跡から出土した丸木舟と蓮の果托（推定2500年前）」を目にします。滑川の古蓮実より1000年以上古いものです。しかし、残念なことに果托には実が残っていなかったのです。「果托があるなら蓮の実もあるに違いない。もう一度そこを探して古蓮実を手に入れたい。」との思いが募ります。

昭和25（1950）年秋、「ここを掘れば必ず蓮の実がある」と確信し、大賀博士はスコップ1丁と発掘資金1万円※1を持って東京大学検見川厚生農場（千葉市検見川）へ赴いたのです。

大賀ハス発掘位置（北村文雄・藤川覚「大賀蓮成立に関する研究」より転載）

(2)古蓮実の発掘が始まる

大賀博士は2度3度農場を訪れ、古蓮実の発掘について農場主任の高野忠興（ただおき）氏に熱心に話しました。始めはバカげた話だと思っていた高野氏ですが、大賀博士の余りに熱心な言動に「何千年と眠ってきたハスの生命を蘇らせることに明るい望みを託し夢を抱いていること、生きる希望や夢こそは正に今の世相に最も欠けているものだ」と思うようになり、この事業に協力してあげようという気になったのです。

高野氏は、大学・新聞・行政・学校・地域等の各方面に発掘の協力を要請して回りました。農場の管理者である東京大学総長・南原繁氏の了解を得て、さらに千葉新聞（千葉日報の前身）が古蓮実発掘の記事を連日報道してくれ、千葉県教育庁からは発掘費用6万円※2の助成を受けることが決まり、千葉市長（宮内三朗氏）も発掘に協力することになりました。

発掘工事は、当時、農場で草炭発掘後の埋め戻し工事を行っていた八戸（青森県）の穂積組が請け負い、直属の近藤組が担当して精力的に働きました。また、毎日十数人の研究者が農場に宿泊し、その世話を高野夫妻が行い、地元千葉市畑町の伊原茂氏（農業委員）は、寝具や食器、食料などの調達に絶大な支援を行いました。

昭和26（1951）年3月3日から工期1週間の予定で発掘が始まり、発掘場所は、丸木舟出土の草炭発掘跡の埋め戻し地の作業条件が悪かったため、北へ50mの場所に移動して行われました。

(3)難航する発掘作業

発掘作業は、まず5坪（約16.5㎡）ほどの広さの場所に木の枠組みを設け、表土を約60センチ掘り下げて草炭層に達し、草炭層をさらに掘り下げます。掘った土は100メートル離れた場所に運び、池の畔でその土をふるってハスの実を探します。土をふるう作業は、地元千葉市立第七中学校（現、花園中学校）の生徒と千葉市立畑小学校の児童が行いましたが、まだ3月上旬のことであり、泥水につかっての作業はつらいものでした。

草炭層は柔らかく掘りやすいものの、水分を多く含み脆くて崩れやすいのです。また、泥湿地ゆえに地下水が高く少し掘ると水が溜まり、湧き出た水をポンプで排水するのですが、翌朝には元の水位まで戻ってしまいます。半日かけて溜まった水を排水し、掘削を行うという作業の繰り返しで、さらに3月3日の発掘以来、雨天続きのため、作業は思うように進みません。

寒い中で、池の畔で泥をふるう子供たち

発掘工事の現場風景、ポンプで排水する

泥炭地は崩れやすいので土留めをして掘削する

毎日作業員25人、児童・生徒40人が懸命に働きましたが、1週間の予定で始めた発掘作業は難航し、当初の予定を大幅に上回り4週間に及びました。

発掘作業が難航しているとき、大賀博士はひとり次のような心配をしていました。

第１に、実が果たしてこの地点から出るか。実と果托は場所を異にするのではないか。果托は出たとしても実は出るだろうか。

第２に、実が出たとしても軟化していないか。軟化していれば実は死んでいる。

第３に、軟化しないで堅いカラをもって出たとしても、果たして生命力を持っているか。これまで千年前のハスを扱ったことはあるが、ハスの実が千年生きられたとしても、倍の2千年も生きられるものか。

こういう条件を並べてみると、ハスの実が出てきて生きている可能性はまことに少ないように思われました。

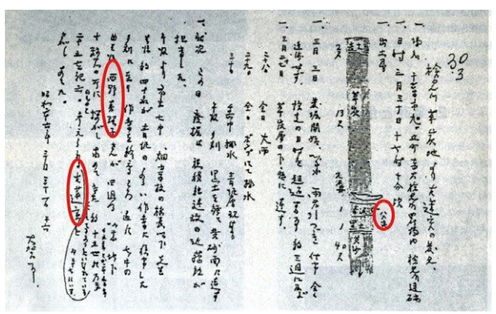
(4)ついに古蓮実を発掘

3月27日には草炭層の底に達し土の色が変わりましたが、3月28日は大雨となり、翌29日は1日排水に追われました。

3月30日も午前中は排水にかかりきりとなり、午後から再び掘り進み、昔の池底の青泥層に達しました。高野氏は、「青泥層は晩までに掘り上げるだろう。青泥より下にハスの実はあるまい。これ以上続けて出費を重ね各方面に迷惑をかけることはできない。」と判断し、発掘工事は３月限りの意向を大賀博士に伝えると、大賀博士はしかたなく同意しました。

「明日31日で工事打切り」と穂積組の氏家主任に伝え、高野氏は農場事務所に向かって歩いていたところ、夕闇せまる真っ暗な道の向こうから「高野さーん、あった、あった!!」との呼び声がし、大賀博士と女生徒たちが現れました。「あった、あったよ、ハスの実が出た。これだ!」と大賀博士は掌(てのひら)をひろげて、1粒のハスの実を見せました。大賀博士たちは嬉しさのあまり一刻も早く高野氏に知らせようと走ってきたのです。帰る道すがら「人事を尽くして天命を待つ」とはこのことかなと高野氏は思ったそうです。

この日の発掘メモには「午後より市立七中、畑小学校の校長以下先生、生徒約40名が青泥のふるい作業に従事した。夕刻に至り作業を終えるころ遂に七中の女生徒・西野真理子さんが４週間以来地下十数尺の所に探し求めてきた約15世紀乃至約25世紀前のものと考えられる古蓮実を探しあてた」と記されています。


上記メモの抜粋

●**日時** 3月30日17時10分頃

●**出土層**　青泥　ハス実

●**状況**　午後より(中略)生徒約40名が青泥のふるい作業に従事し、夕刻に至り作業を終えるころ遂に七中の女生徒西野真理子さんが(中略)古蓮実をさがしあてた。

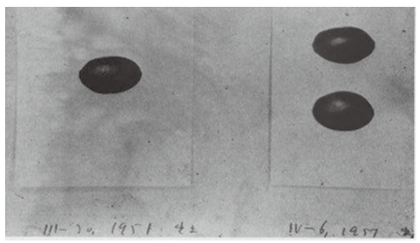
大賀博士は3月31日、千葉県の太田教育長に古蓮実発見を報告するとともに、「1個だけでは心許ない」と発掘延長を要請し、1週間延長することになりました。その結果、4月6日、現地視察の太田教育長が見ている前で、さらに２粒の実がふるいだされました。

発掘されたハスの実は、3粒とも軟化しておらず堅い種皮に覆われており、発芽する生命力を持っていることが期待されました。

古蓮実の発掘は、期間34日、延べ2,500人、総費用40万円[※3]という大事業となり、3粒の実が発掘されました。発掘費用のうち足らない分は、「このせせこましい世の中に、夢を掘るのもいいじゃないか」と、穂積組の穂積重二社長が負担したそうです。

※1、2、3は今の貨幣価値でそれぞれ約8万円、約50万円約320万円

古蓮実発見時の集合写真


発掘された3粒の古蓮の実

2　古蓮実の発芽と生長

(1)発芽実験

2500 年前の遺跡から発掘された古蓮実、果たして発芽するかどうか、発芽しても花を咲かせるまでに生長するかどうか、確証はありません。大賀博士は、独自の理論[※4]により「古蓮実は 1700年以上の寿命があるはず」と望みを託し、発掘から約1か月後の昭和26（1951）年5月6日、東京都府中市の大賀博士自宅にて発芽実験が行われました。

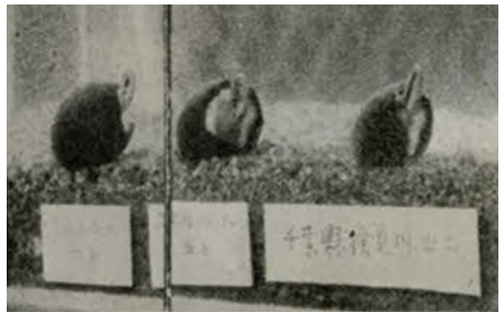
※4タンパク質の凝固と温度の関係の実験公式

ハスの実は、たいへん硬い種皮に覆われており、そのまま水に漬けただけでは発芽しにくいため、発芽処理を施す必要があります。大賀博士は、実の臍部(さいぶ)（芽が出る側）の種皮をハサミで切除した後、試験水槽に古ハスの実を投入しました。

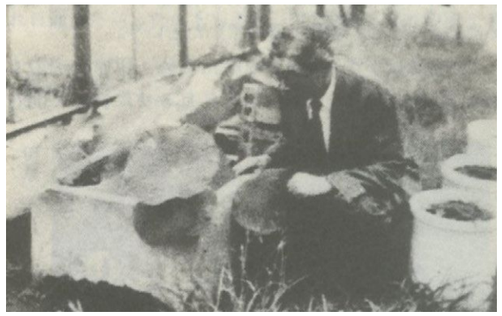
3粒のうち1粒は、比較のためフランテン出土の実及び不忍池出土の実も並べて発芽試験が行われました。

5月9日、最初に発見された実（3月30日発掘）が発芽を始めました。その後、残る2粒も発芽しました。

発芽実験の様子『毎日グラフ』



左：不忍池、中：フランテン、右：検見川



ハスの生長を見る大賀博士

千葉県農業試験場で生長する古ハス

(2)発芽と生長

発芽した古蓮実のうち1粒はまもなく枯死し、2粒が生育を続けました。「残る2株は絶対に枯らしてはならない」と心配した大賀博士は、実生苗を千葉県農業試験場（当時、千葉市都町に所在）へ移して栽培を委託することにしました。

大賀博士が同試験場へ栽培を委託したのは、地元であったことと、当時の場長・竹馬誠三郎氏が同県人（岡山県出身）で、栽培に大変協力的であったことによると伝えられています。

6月12日に試験場へ搬入した苗は、3枚の葉が出かかっていましたが、外見が腐敗病※5の状態になって衰弱し、殺菌剤を施したものの3〜4日後に枯れてしまいました。

6月17日、残る1つの実生苗（3月30日発掘）に最後の望みを託し、博士は受け取りに来た試験場の石渡英雄氏に株を手渡したのです。19日、田土を入れたコンクリート製の水槽（50センチ四方）に植え付けられ、虫害を防ぐため網室に移されました。石渡氏と大賀博士の共同管理で、水銀剤やボルドー液など病害に対しても細心の注意を払って栽培されました。

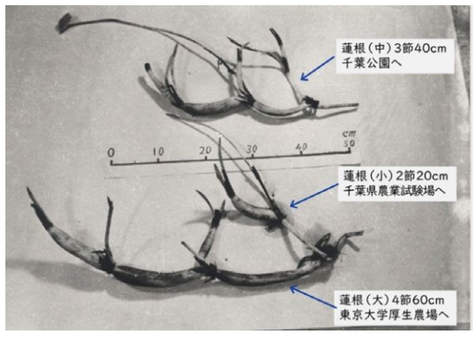
試験場に移してから1か月後には、実生株は茎を伸ばし始め、9月下旬には水槽いっぱいにレンコンが広がり、8枚の葉をつけるまでに生長したのです。大賀博士はこの時点で「普通、開花には発芽から3か年かかるのだが、この分だと来年は咲くだろう」と予想していました。

※5細菌に感染し腐って枯れてしまう病気

(3)レンコンの形成と分根

昭和27（1952）年4月7日、農業試験場において大賀博士、竹馬場長らの立会いのもとで、順調に生育した古ハスを掘り上げたところ、3個のレンコン（地下茎）が収穫されました。

レンコンは3個に分根され、4節60センチ（大）のものは東京大学検見川厚生農場、3節40センチ（中）のものは千葉公園弁天池（現菖蒲園）、2節20センチ（小）のものは千葉県農業試験場で、それぞれ栽培されました。



昭和27（1952）年4月7日に掘り上げられたレンコン

3　古ハスの開花

東京大学検見川厚生農場には4月7日に植え付けられましたが、当時厚生農場には牛馬などの家畜が放牧されており、ハスの株を動物に食べられるおそれがありました。食害を心配した農場主任の高野氏は、農場に近い千葉市畑町の伊原茂氏に栽培を依頼し、5日後の4月10日に伊原氏の家に移されました。

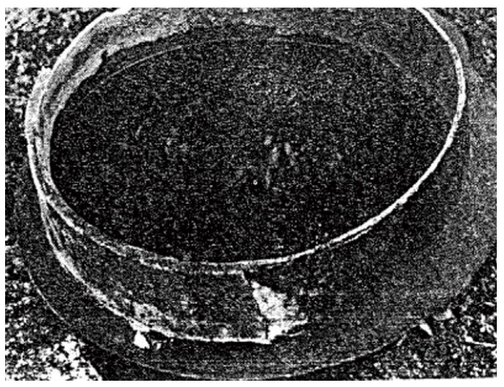
伊原氏は、地元畑町旧家の篤志家で、醤油醸造を営む傍ら農業委員を務めており、発掘時から多大な支援をされ、大賀博士や高野氏とも懇意でした。

高野氏の依頼を快諾した伊原氏は、庭の日当たりのよい場所に置かれた鉄製の大釜に田土を入れ、厚生農場から移されたレンコンを植え付けました。

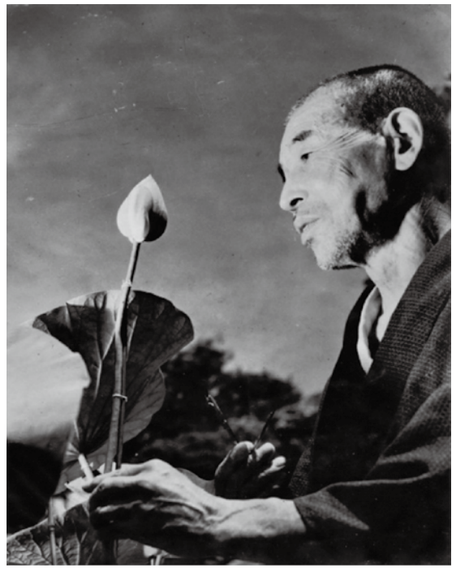
伊原氏は、大賀博士の栽培方法に忠実に従い、日当たりや肥料、病害虫などに心配りをして丹精込めて古ハスの栽培に努めました。

古ハスは行き届いた管理のもと順調に生育し、昭和27（1952）年7月1日頃に第一の蕾をつけ、14日には第二の蕾をつけました。

7月18日未明に開花するという大賀博士の見立てを聞いて、報道や大学の関係者など大勢の人々が伊原宅を訪れ、固唾を飲んで見守っていました。7月18日早朝、蕾の先端がわずかに開口し、古ハスは2千年の眠りから覚めついに開花したのです。以来、古ハスの最初の開花日は昭和27（1952）年7月18日とされています。



醤油醸造用に使われていた後、防火水槽として外側をコンクリートで覆われた内径63センチ、深さ50センチの鉄製の釜



7月16日 開花2日前の蕾を見守る伊原氏

開花した古ハスを見つめる大賀博士

開花を喜ぶ大賀博士と伊原氏

開花2日目の花を愛でる大賀博士

開花2日目の古ハス

畑小児童にハスの開花を説明する大賀博士

翌19日は開花2日目、古ハスはその全容を現し、大賀博士や発掘に携われた人々に大きな感動を与えました。永い眠りから覚めたハスは、花弁数24枚、花径25センチの大型で淡紅色の美しい花でした。

この時の様子は、昭和27（1952）年8月11日号の『毎日グラフ』や、同年11月3日付のアメリカのグラフ誌『LIFE』などにより、「花開いた二千年前の蓮」や「世界最古の花」として国内外に広く報道されました。そして、まだ戦後の動乱期にあった日本の人々に大きな希望と自信を与えてくれたのです。

3節40センチのレンコンは、千葉市の希望により市内弁天町の千葉公園・弁天池（現菖蒲園）に植え付けられました。大賀博士は現地に立会って、植え付けの向きや深さなどについて直接指導され、畳1枚半ほどの場所に植え金網で覆いを施しました。当時は、現在ほど周囲の樹木が生い茂っておらず、日当たりも良くハスの生育にとても良い場所だと大賀博士は語っていたそうです。このハスは、昭和28（1953）年8月5日に初めて開花し、その後いくつか咲きました。千葉公園では、弁天池のほかに荒木山の展望台脇にコンクリート製の池を作りオオガハスを栽培していました。

2節20センチのレンコンは、千葉県農業試験場の水田で栽培され、3本のうち最も小さかったこともあり、他の2つのものより遅れて、昭和30（1955）年に開花しました。結果として、3個のレンコンの大きさと開花到達年数との間には逆の関係が示されています。

昭和38（1963）年、試験場が都町から大膳野町へ移転した際、オオガハスは刈田子町の水田作研究室の田圃に移植されました。昭和60（1985）年には大膳野町の試験場前にコンクリート製の水槽を作り、オオガハスを移しました。

開花1日目を報じる毎日新聞 昭和27（1952）年7月19日

開花2日目を報じる毎日新聞 昭和27（1952）年7月20日

『毎日グラフ』の特集、昭和27（1952）年8月11日号

4　古ハスの命名と古蓮実の年代

(1)古ハスの命名

昭和28（1953）年4月25日、高野忠興氏を申請者として、検見川出土の古ハスの実から成立したハスを、出土場所と発見者名をとり「検見川の大賀蓮（けみがわのおおがはす）」と名付けて、千葉県教育委員会あてに千葉県天然記念物指定の申請が行われました。昭和29（1954）年3月31日、千葉県文化財保護条例第3条の規定により千葉県天然記念物に指定されます。

指定時の所在地は、千葉市浪花町26、所有者は、東京大学農場となっています。その後、東京大学農学部緑地植物実験所の開設に伴い、所在地は、畑町1051、所有者は東京大学に変更されています。

それまでは、「検見川出土の古ハス」や「二千年ハス」などと呼ばれていましたが、天然記念物に指定された時から、正式に「大賀蓮（おおがはす）」という名称が定まり、現在、大賀蓮は、花蓮（観賞用ハス）の品種名として正式に採用されています。

「おおがはす」の表記は、「大賀蓮」「大賀ハス」「オオガハス」の3つが混在しています。千葉県天然記念物指定に基づく正式な表記は「大賀蓮」です。生物学では、カタカナの表記が通例ですので「オオガハス」と表記すべきですが、生物学者の大賀博士は自身の姓を残したかったのか、折衷的に「大賀ハス」と表記していました。

現在、一般的には「大賀蓮」と「大賀ハス」が混在した状態が主流のようです。千葉市では、市の木・花・鳥がすべてカタカナ表記であることから、「千葉市の花・オオガハス」としています。

(2)古蓮実の年代

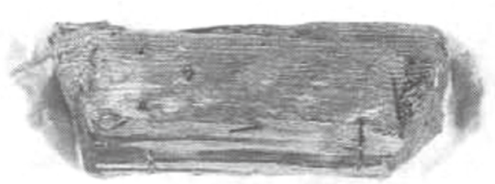
古蓮実の年代を測定するためには、その検定材料である出土果実が必要となります。しかし、3粒とも発芽実験で使ってしまったので果実が存在しておらず、正しい年代測定をすることができません。このため大賀博士は、古蓮実と同じ深さから出土した丸木舟（カヤの木製）の年代から間接的に推定することにしました。

丸木舟の年代について、考古学者・甲野氏は2500～3000年前、東大教授・坂口豊氏は、検見川の泥炭層堆積状況から約3000年前と推定しています。

大賀博士は、昭和26（1951）年12月、来日したカリフォルニア大学の古生物学者のチェイニー博士に、丸木舟の材2片約500グラムを託し、シカゴ大学原子核研究所のリビー博士にラジオカーボン・テスト（放射性炭素年代測定法）を依頼したのです。リビー博士は、この測定法の発見により、昭和35（1960）年にノーベル化学賞を受賞した研究者です。

大賀博士はこの時から1年半あまりラジオ・カーボンテストの結果を待ちに待ち、しびれを切らしていたとき、ついに昭和28（1953）年5月20日、チェイニー博士からの書簡が届き、大賀博士は涙を流して喜んだそうです。

チェイニー博士と大賀博士



年代測定に用いた丸木舟の木片（櫂の一部）

チェイニー博士は、「リビー博士は、丸木舟の材を2度テストして、3052年±200年と3277年±350年、平均3075年±180年の結果を得ました。大賀博士が発見した古蓮実の寿命が約3000年であることが分かったことは非常に興味があります。検見川からさらに1回分のテスト用として35粒ほどの古蓮実の発掘を熱望します…」と記しています。

大賀博士はこの報告を受けて、「検見川出土の丸木舟の年代は、ラジオ・カーボン・テストの結果、約3000年と定まった。この丸木舟を石器時代のものと見ていた慶大教授・松本信宏氏や明大教授・杉原壮介氏などは喜ばれた。しかし、待ちに待っていた私には、古蓮実を直ちに3000年とすることに少し古すぎると思われる。臆病な私は、むしろ2000年よりさらに下げて1500年位にしたい心持でさえある。また、1回分のテスト用として35粒を送ってほしいというチェイニー博士の要望には、一昨年の労苦をもう一度くり返すことは、私の環境と健康が許さない…」と述べています。

ラジオ・カーボン・テストの年代測定や考古学的な年代推定、さらに「タンパク質の凝固と温度の関係」という独自理論（1700年前）などから総合的に判断し、大賀博士は、ごく内輪に見積もって、古蓮実の年代を2000年前と推定したのです。

5　平和と友好の使者

昭和27（1952）年伊原氏宅で開花したハスは、翌28(1953)年4月9日レンコンが掘り上げられ、地元をはじめとして西ドイツ、東京大学三四郎池、国立博物館、穂積家（青森県八戸市）、牧野富太郎氏、大賀家など国内各地に分根されました。

(1)西ドイツ国際園芸博覧会にオオガハスを出品

昭和28（1953）年ハンブルク市国際園芸博覧会G・ノワル博士から同博覧会へ大賀ハス出品の要請を受け、大賀博士はレンコン4個を選びました。レンコンはライフ社を介して4月14日に羽田空港から発送され、16日に現地へ到着。博覧会場内の温室に特設された水槽内に植え付けられました。8月23日の朝、最初の開花があり、計3つの花が咲いて博覧会の話題となり、『LIFE』誌にも掲載されました。当時この博覧会でバラを観賞していた徳川夢声氏は、図らずもオオガハスの開花に立ち会い、大変驚かれたそうです。

昭和29（1954）年3月22日、『1953、国際園芸博覧会』と彫られた下に『自由なるハンザ同盟市ハンブルク名誉賞』と手彫りのある銀盆（外径30センチ、内径20センチ、深さ1センチ）とG・ノワル博士からの丁重なる手紙が大賀博士に贈られました。

ハンブルク国際園芸博覧会のオオガハス

(2)中国へ贈られたオオガハスの実

昭和38（1963）年秋、大賀博士及び阪本祐二氏により、和歌山の大賀池50粒、千葉公園弁天池50粒合わせて100粒のオオガハスの種子が、博士の墨書「蓮平和象徴也」とともに、中国科学院初代院長の郭沫若（かくまつじゃく）氏のもとへ贈られました。郭氏は、北京、上海、南京、武漢など10か所へ分配し、各所で発芽し、昭和40（1965）年には各所で開花したそうです。同年、武漢植物園において中国古代ハス（晋蘭店ハス）とオオガハスの交配を行い、この交雑種第一代を「中日友誼蓮（ちゅうにちゆうぎれん）」と命名しました。

郭氏は、「願這種中日人民友誼之花　早日在日本結実」（中日人民の友誼の花の種となり、早く日本に在って実を結ぶことを願う）として、種子10粒を阪本氏に贈りました。その後、中国の社会混乱により中日友誼蓮は絶滅してしまったため、昭和54（1979）年武漢植物研究所は阪本氏に中日友誼蓮の分根を要請し、阪本氏は来日した鄧穎超（とうえいちょう）氏にこれを託しました。

昭和62（1987）年4月、和歌山県の阪本家が寄贈した中日友誼蓮と舞妃蓮（まいひれん）のレンコンは、平和と友好の使者として、みなと公園（千葉市中央区）に植えられました。

郭沫若氏書簡（阪本祐二氏あて）

みなと公園に中日友誼蓮を植える吉田公平氏と松井旭千葉市長

(3)日米親善につくした舞妃蓮（まいひれん）

昭和35（1960）年秋、米国コロラド州デンバー在住の日系人・小川一郎氏が、ご訪米中の皇太子ご夫妻にアメリカ黄花蓮の果実を寄贈しました。大賀博士がこの実を発芽・育成し、翌年、阪本氏へ分根しました。昭和37（1962）年に開花したハスを大賀博士は、皇太子由来のハスとして「王子蓮（おうじはす）」と命名します。

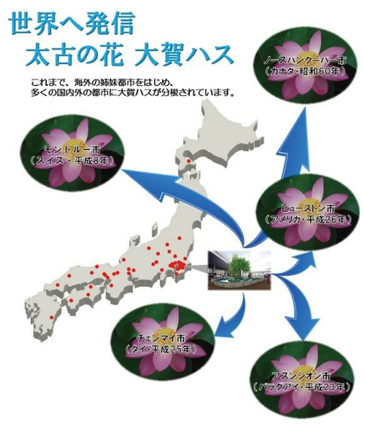
昭和41（1966）年阪本祐二氏は、王子蓮とオオガハスの交雑により新たな花蓮を作出しました。花弁の形状や閉じ方は王子蓮の性質を持ち、花弁がねじれて「舞う」がごとき姿を呈することと、美智子妃殿下の美しさにちなみ「舞妃蓮」と名付け、皇太子殿下に献上された舞妃蓮は、昭和43（1968）年開花しました。

昭和44（1969）年和歌山県出身でアメリカに移住した造園技師の谷口勇氏は、テキサス州オースチン市のジルカー植物園に自費で造った日本庭園を市へ寄贈しました。日本の新聞で舞妃蓮を知った谷口氏から阪本氏に分根を要請してきました。阪本氏は快諾し、舞妃蓮など５種類のハスをジルカー植物園へ贈りました。日本庭園の池に植えられた舞妃蓮は、日米親善の花として当地の人に親しまれましたが、谷口氏の没後、日本庭園のハスは消えていったようです。

平成27（2015）年、大阪在住の方を通じてオースチン市から、舞妃蓮の分根依頼が阪本尚生氏（祐二氏の子息）にありました。日本庭園開園50周年記念（令和元（2019）年）にあわせて舞妃蓮を再び咲かせたいとの思いで分根を依頼してきたのです。平成29（2017）年4月に阪本家の舞妃蓮とオオガハスがオースチンのジルカー植物園に贈られました。同年８月に、英語版リーフレット「舞妃蓮」500部が阪本氏からオースチン市ジルカー植物園へ贈られました。

昭和49(1974)年オースチン日本庭園の阪本夫妻と谷口氏(中央)

オオガハスはその後も国内はもとより海外でもおよそ200か所以上の地域や国で栽培され、友好の使者として美しい花を咲かせています。国内228か所、海外17か国（ドイツ、アメリカ、中国、韓国、カナダ、スイス、パラグアイ、タイ、シンガポール、オーストラリアなど）。※令和4（2022）年4月1日現在



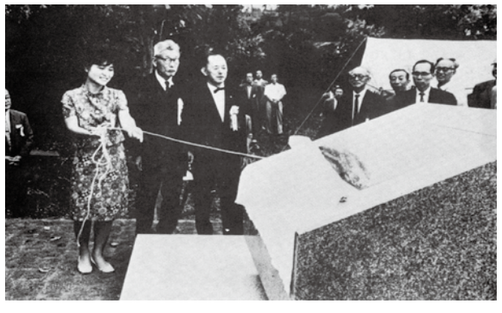
6　発掘碑と大賀博士育英会

(1)大賀ハス発掘碑の建設

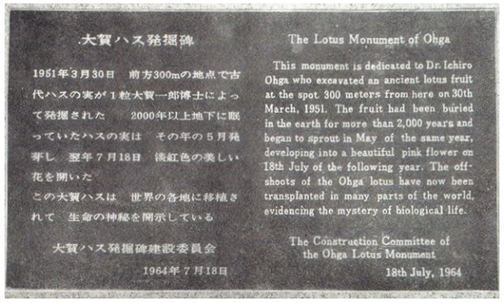
昭和35（1960）年頃からオオガハスの発掘地点に記念碑を建てようという話が持ちあがりました。昭和39（1964）年は東京オリンピックの年で、発掘地点は東京大学検見川総合運動場となり、近代五種競技「クロスカントリー」のオリンピック会場になるというのです。そこで、オリンピックに合わせて、昭和39（1964）年に除幕式を行うことになりました。

クロスカントリーが行われた東大検見川総合運動場

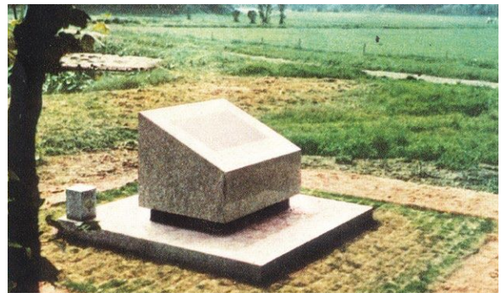
発掘碑の建設に際しては、菅形由夫（すがかたよしお）氏（大賀ハス発掘碑建設委員会事務長）が献身的な努力をなされ、昭和39（1964）年7月18日に除幕式は盛大に開催されました。式典には、杉本郁太郎氏（千葉はすの会会長、発掘碑建設委員長）、宮内三朗千葉市長、西野真理子さん（初めに古蓮実をふるい出した人）らが出席し、文部大臣、東京大学総長、府中市長らの祝辞もいただきました。除幕式のあと午後には、千葉市立花園中学校で大賀博士による講演もありました。



除幕式：左から西野さん、大賀博士、杉本郁太郎氏



大賀ハス発掘碑の碑文



現在の発掘碑と修景池

発掘碑には「1951年3月30日、南方500mの地点で古代ハスの実が大賀一郎博士によって発掘された。2000年以上地下に眠っていたハスの実は、その年の5月発芽し、翌年7月18日淡紅色の美しい花を開いた。この大賀ハスは世界各地に移植されて、生命の神秘を開示している。大賀ハス発掘記念碑建設委員会　1964年7月18日」と日本文、英文で刻まれています。発掘碑は、大賀博士の出身地岡山県産の万成石（通称・桜御影）で造られています。

発掘碑の除幕式に際して大賀博士は、次のような感謝の言葉を述べています。

「(前略）私がここから出土した古蓮の果托を初めて見てから、ここを発掘して古蓮の果実を掘り出すまでの一連の物語は、検見川の町史と私の生涯を連ねる一挿話でございます。私が昭和 26年3月30日午後５時、この地の古蓮の実を発見した時の感慨は、生涯中の最大の事実であります。それはまた検見川町史に、いや、日本学会、世界学会に偉大なる印象でございます。また、この実を発芽させて

翌27年7月18日、畑町伊原茂氏邸に初花を見たその一瞬の光景は、世界の目をこの検見川に集めたと思います。

検見川は、この一粒の古蓮の実の発見によって世界に銘記されました。小さなる事実は、決して小ではありません。如何に小さくとも、一個の隠れた生命は全世界を振動せしめます。私が14年前一粒の古蓮の実を掘り出して感激したその涙は今ここに、この素晴らしい発掘碑となりました。（中略）発掘の際と同様に大勢の方々のご厚志によって、今日この検見川の地に発掘碑を建立していただきました。ありがたい極みでございます。

本日は、愛知文部大臣を始め、大河内東京大学総長、友納千葉県知事、三木岡山県知事、宮内千葉市長、矢部府中市長よりの祝辞をかたじけなく思います上、朝野の沢山の方々のご同情による、この盛事を見まして、私は感涙が込み上げてまいります。無上の幸せでございます。本当にありがとうございます。謹んでお礼を申し上げます。」

発掘碑の建設にあわせて、「発掘地にオオガハス」をという声が上がり、昭和39（1964）年3月に千葉公園から東大グラウンドにオオガハスが分根され、13年ぶりに発掘の地に里帰りしました。大賀博士の指導のもとに植え付けられたオオガハスは、記念式典の前に無事に開花したそうです。

発掘地に里帰りしたオオガハスを見る大賀博士

発掘碑の完成を喜んでいた大賀博士は、その年の10月に倒れ、翌40（1965）年6月15日に永眠しました。

(2)大賀博士育英会

大賀博士が昭和 39（1964）年に倒れ闘病生活を送っていることが報道されると、全国から多くのお見舞いが寄せられ、大賀博士の世話をするために、近親者や知人で構成された「大賀一郎先生世話人会」が生まれました。

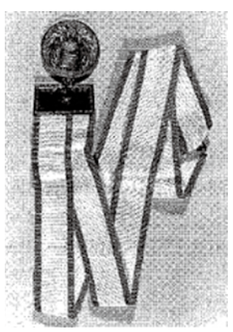
見舞金は大賀博士の療養費に当てられましたが、亡くなってから遺された分は、寄付された遺品の整理や「理学博士大賀一郎科学論文選集」の発刊などに使われました。さらに大賀博士にゆかりの深い府中市、千葉市、吉備町に寄贈されることになりました。千葉市は、古蓮実の発掘に多大な協力をした花園中学校の育英資金にしようということになり、昭和41（1966）年、寄贈された 50 万円を基にして花園中に、「大賀博士育英会」が設立されました。

育英会から学資の援助として、当初は 5 千円、その後 3 万円を奨学金一時金として出しておりましたが、現在の育英会は、その年度に顕著な活躍をした団体（部活動等）や生徒に対する表彰が中心になっています。

花園中にとってオオガハスは記念すべきものですが、大賀博士にとっても花園中は古蓮実の発見に多大な協力をしてくれた忘れられない学校でした。

◀大賀博士育英会だより

大賀博士育英会だより



大賀博士育英会メダル

7　大賀一郎略年譜

西暦	元号	年齢	主な出来事
1883	明治16	0	岡山県都窪郡吉備町小西（旧・賀陽郡庭瀬村、現岡山市）に、父綱太、母と免の12人弟妹の長男として4月28日生まれる。
1901	明治34	18	岡山中学を卒業するが、チフスに罹り進学を断念。 回復後、母校の岡山高等小学校で3年生の授業を受け持つ。
1902	明治35	19	旧制第一高等学校二部に入学。内村鑑三宅へ聖書講義を受講するようになる。
1905	明治38	22	旧制第一高等学校卒業。この年、内村鑑三門下に入る。東京帝国大学理科大学植物学科に入学。卒業研究は、藤井健次郎教授の指導により「アサガオの細胞学的研究」。
1909	明治42	26	東京帝国大学卒業後、大学院に進学。専攻は植物細胞学で、「ハスの受精現象について」も研究を始める。
1910	明治43	27	旧制第八高等学校講師に任ぜられ名古屋に赴任。生物学を講ずる。
1911	明治44	28	内村鑑三夫妻の媒酌で塩尻うたと結婚する。旧制第八高教授（生物学）となる。
1917	大正6	33 34	八高教授を辞任し、南満州鉄道株式会社に入社し家族とともに大連に赴く。 南満州フランテンの泥炭地から古蓮実を採集し、研究を始める。また、日曜学校を創設し、キリスト教の普及に献身する。
1923	大正12	40	会社の命により米国ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に留学し、1年間植物生理生態学をB・E・リビングストン教授の指導のもとで研究する。 古ハスの研究は大きなニュースとなり、「ボルチモアサン」や「ニューヨークタイムズ」などに「500年生きた古蓮実の発芽に成功」と報道される。この間、野口英世、高峰譲吉らと交流を深める。
1925	大正14	42	欧州に渡り、ロンドン大英博物館にて同館所蔵の古ハス及び古種子の発芽実験に従事する。
1926	大正15	43	大連に帰り、奉天教育専門学校の教授に就任する。
1927	昭和2	44	「南満州フランテン産の生存古蓮実の研究」により東京帝国大学から理学博士の学位を授与。植物学の学位は牧野富太郎に次いで2番目。
1932	昭和7	49	南満州鉄道を退社し東京へ戻り、東京女子大学、東京農林学校等で講義。
1935	昭和10	52	上野不忍池の弁天堂にて「ハスの開花音」について公開実験を行う。この臨地実験によりハスの開花時における無音説を実証する。
1944	昭和19	61	東京農林学校（現・東京農工大学農学部）講師を委嘱される。
1945	昭和20	62	淀橋区上落合の住家、戦火のため焼失し多くの蔵書を失う。東京都府中町新成区（現・府中市）へ転居する。
1946	昭和21	63	府中町民の有志により「大賀博士後援会」が設立される。
1950	昭和25	67	朝日新聞社企画による「平泉中尊寺藤原三代遺物学術調査」に参加し、4代泰衡首級桶から800年前のハスの実（後に中尊寺バスと命名）を採取した。 関東学院大学教授に就任、及び同学院高等学校生物学特別授業に出講。鳥取大学非常勤教授に委嘱される。 千葉県滑川（現成田市）出土の古蓮実（推定1200年前）の発芽実験に成功するが、50日後に肥料管理の失敗で枯らす。

西暦	元号	年齢	主な出来事
1951	昭和26	67 68	千葉県検見川の東大農場の泥炭層から古ハスの実 (約2000年前) を発掘。 5 月発芽に成功し、1 つの実生苗が順調に生育する。 米国カリフォルニア大学チェイニー教授に、検見川出土の丸木舟の材（カヤ）の埋没年代の調査を依頼する。 当麻曼荼羅（たいままんだら）は絹糸であると発表し60年に渡る論争に終止符を打つ (P49参照)。
1952	昭和27	68 69	綴織研究法と麻布の調査のため正倉院に出張する。その後、宮内庁長官の委嘱により昭和28年から30年まで正倉院宝物の植物部門、特に麻布について予備調査を行う。 4 月に掘り上げた蓮根の 1 つが 7 月 18 日に初めて開花する。国内外に報道され11月3日付米国『LIFE』誌にカラー写真が掲載される。
1953	昭和28	70	二千年ハス（大賀ハス）を国内各地に分根、寄贈する。 シカゴ大学原子核研究所 W・F リビー博士のラジオカーボン・テストにより、検見川出土の丸木舟の材（カヤ）は、3075 ± 180 年以前のものであると鑑定される。 西ドイツ・ハンブルク国際園芸博覧会に出品した古ハスが開花する。
1954	昭和29	71	古ハスが「検見川の大賀蓮」として千葉県天然記念物に指定される。
1956	昭和31	73	滋賀県守谷町に妙蓮池を訪ね、以来8年間に20数回来訪し調査研究を重ねる。
1959	昭和34	76	府中市中央公園で第 1 回の観蓮会（市民のハスを見る会）を開催。 府中市の婦人会有志による「蓮の実会」誕生。同会から研究費や資材を贈られる。
1961	昭和36	78	文部省文化財審査専門委員に選任される。 紫綬褒章を授与される。褒章理由「長年ハスの研究に専念し、さらに進んで国宝当麻曼荼羅の織成について科学的解明を行い、日本古代染織史の研究に寄与する等事績まことに著明である」。
1964	昭和39	81	東京オリンピックの開催に併せ、東京大学検見川総合運動場内の古ハス発掘地に「大賀ハス発掘碑」が建つ。府中市の自宅にて脳軟化症のため倒れる。
1965	昭和40	82	6月15日、東大病院にて永眠。勲三等瑞宝章が授与される。 大賀博士遺品のハス約20種が、東京大学農学部園芸実験所、府中市中央公園、都立神代植物園等に移植される。蔵書約6300冊が府中市に寄贈される。

第2章

オオガハスを活かしたまちづくり

第2章 オオガハスを活(い)かしたまちづくり

1 千葉市におけるオオガハスの歩み（略年表）

西暦	元号	主な取り組み
1952	昭和27	千葉公園の弁天池（現菖蒲園）でオオガハスの栽培が始まる
1953	昭和28	千葉公園のオオガハスが８月５日に初めて開花、この年４つの花が咲く
1954	昭和29	千葉県天然記念物の指定「検見川の大賀蓮」 東京大学農学部園芸実験所（花ハス研究の拠点）の開設
1955	昭和30	千葉県農業試験場のオオガハスが初めて開花
1956	昭和31	第１回千葉はすの会の開催（千葉公園で2000年まで45回開催）
1964	昭和39	東京オリンピックに合わせ「大賀ハス発掘碑」を建立（東京大学検見川運動場） 千葉公園から東京大学検見川運動場の心字池にオオガハスを分根・移植
1967	昭和42	第１回花園ハス祭りの開催（花園公園で地域住民主催による）
1968	昭和43	千葉公園のオオガハスが腐敗病で枯れ始めるが、土壌入れ替え・消毒で回復する
1987	昭和62	和歌山大賀ハス保存会から舞妃蓮・中日友誼蓮を分根、みなと公園に植え付け 開花35周年記念の特別展、講演会の開催、記念誌「大賀ハス」発行（1988）
1990	平成2	国際花と緑の博覧会に蓮華汀(れんげてい)を出展しオオガハス等の花ハスを展示
1993	平成5	市の花に「オオガハス」が選定される。千葉公園ハス池の整備に合わせ、記念式典及びオオガハスの植え付け祭（106カ所、318株）を開催
1994	平成6	千葉公園ハス池の畔(ほとり)に蓮華亭（ホール、展示等）を建設
2001	平成13	花園ハス祭り実行委員会が大賀ハス開花50周年記念誌を編纂(へんさん)、発行
2003	平成15	花のあふれるまちづくりのシンボルキャラクターとして、市の花・オオガハスの妖精をイメージした「ちはなちゃん」を制定。ちはなちゃんグッズ販売開始
2007	平成19	東京大学が検見川の「緑地植物実験所」の移転・売却計画を発表
2008	平成20	千葉市議会で「緑地植物実験所の存続を求める請願」を全会一致で採択 花びと会ちばの主催で「オオガハスの観察会」（2016年から大賀ハスまつりに改称）を開催
2012	平成24	開花60周年のリーフレット制作、ミニ企画展開催、オオガハスの系統保存の開始 東大緑地植物実験所が閉鎖、地域住民による「大賀ハスのふるさとの会」が発足 同会によりハス見本園の管理・育成、花園ハス祭り観蓮会を開催
2013	平成25	オオガハス等を訪ねる「駅からハイキング」が平成25～29年に開催
2015	平成27	成田空港に建設された「蓮の和風庭園」に千葉公園からオオガハスを分根
2016	平成28	大賀ハスまつりの規模を拡充し9日間連続のイベントとして開催 千葉市らしさを形成する「4つの地域資源」の一つに「オオガハス」を選定
2017	平成29	花見川区の新設図書館の名称が公募で「千葉市みずほハスの花図書館」に決定 開花65周年、「大賀ハスシンポジウム」を市民団体の主催で開催
2018	平成30	千葉市の花オオガハス制定25周年記念シンポジウムを開催（千葉市、花びと会ちば共催）ハス守さん養成講座第1回開催
2019	令和1	花見川区役所の正面ガラス窓にオオガハスのイメージ画をラッピング
2020	令和2	オオガハスの子供向け紙芝居を制作（花見川区役所）
2021	令和3	JR新検見川駅に「オオガハス案内マップ」「ちはなちゃんデザイン蓋(ぶた)」を設置 大賀ハス開花70周年記念事業の実行委員会準備会を発足
2022	令和4	千葉公園蓮華亭の展示を一部リニューアルする 大賀ハス開花70周年記念フォーラムを開催 千葉公園近くのポストに、オオガハスをイメージしたラッピングを実施

2 市内のオオガハス栽培

(1)千葉公園

昭和26（1951）年、検見川の東京大学厚生農場で発掘され、発芽し成長したレンコン3本の内1本が、翌昭和27（1952）年4月千葉市中央区の千葉公園弁天池の一角に植え付けられました。そのレンコンは、昭和28（1953）年8月5日に初めて開花して、この年４つの花が咲き、千葉公園南門脇のハス池で栽培が続きました。

その後、荒木山展望台の横にもハス池が整備され、古代ハスを愛でる風流人の集いとして、昭和31（1956）年から毎年オオガハスの開花記念日である7月18日に、「千葉はすの会」が平成12（2000）年まで開催されました。

その後の昭和43（1968）年、ハスが腐敗病に感染したため、レンコンを掘り起こし、池の完全消毒を行い危機を乗り越えました。

昭和43（1968）年の掘り起こし作業の様子

平成4（1992）年に千葉市の政令指定都市への移行を記念に、翌5（1993）年3月綿打池脇に広さ900㎡のハス池と、ハスを間近で眺めることができる木道と芝生広場を整備し、綿打池の水の循環を利用した栽培する場となりました。

満開のハス池全景

翌６（1994）年には、ハスの展示施設である蓮華亭がハス池隣に建設され、外周のデッキからは開花したハスの花を一段高い位置から見渡すことができます。

ハスの良好な成長には、株分け・植替えが欠かせないため、ハス池を3分の1ずつ区分けし、植替え作業を3年毎に行っています。

ハスは、毎年5月末から６月上旬に最初の花を咲かせ、６月末に開花のピークを迎え、７月中旬までが見頃です。

オオガハスの花が一番の見ごろを迎える毎年6月中旬～下旬に、蓮華亭・ハス池で「大賀ハスまつり」が開催され、多くの来園者で賑(にぎわ)います。

満開のハス池（蓮華亭とともに）

(2)東京大学旧緑地植物実験所

オオガハス発掘の地である、花見川区畑町の東京大学総合運動場に隣接する旧緑地植物実験所では、ハスの開花時期に合わせ昭和42（1967）年から観蓮会を開催してきました。平成24（2012）年に実験所が閉鎖された後は、地元のボランティアグループ「大賀ハスのふるさとの会」がハス品種見本園の管理を行い、毎年7月の開花時期には施設が一般開放されています。この施設は、国内外約100種類のハスが栽培されており、オオガハス以外にも白・黄・赤色の様々なハスの花を観賞できます。開放期間も長く、７月上旬と下旬では、異なる品種の花を楽しめます。展示ブロックも、日本古来品種、中国等海外の品種、近代の園芸品種に分かれているので、それぞれの花が観賞できます。

観蓮会一般開放時の様子

様々な園芸品種のハス見本園

(3)見浜園

平成2（1990）年に開園した千葉県立幕張海浜公園Cブロック見浜園の修景池にもオオガハスが栽培されています。平成28（2016）年に池を改修し、ハス池を拡張しました。見浜園は有料施設ですが、ハス池は無料区域との境界部にあるため、外側の無料区域からも鑑賞ができます。見頃は、６月下旬～７月中旬です。

また、令和2（2020）年には、東京オリンピック開催に合わせ、多くのハスの花を観賞していただくため、10種類の園芸品種のハスプランターを展示しました。

見浜園のオオガハス栽培池

見浜園の園芸品種のハス展示

(4)しらさぎ公園

オオオガハス発掘の地、花見川区畑町の東京大学総合運動場の近くにある花見川区役所の北側に整備された公園です。平成7（1995）年に開園した 1.8haの公園に、オオガハスを栽培する374㎡の池があり、見頃は6月下旬～７月上旬です。

しらさぎ公園のオオガハス栽培池

3　国際花と緑の博覧会とオオガハス

(1)国際花と緑の博覧会とは

「国際花と緑の博覧会」(以下「花の万博」という。)とは平成2(1990)年4月から9月末まで大阪鶴見緑地にて開催された国際園芸博覧会です。この博覧会は、国際博覧会条約に基づく特別博覧会であり、アジアで初めて開催されました。

テーマは「花と緑と人間生活のかかわりをとらえ、21世紀へ向けて潤いある豊かな社会の創生をめざす」でした。背景には、当時、着実に成長して経済大国となった一方、世界的な環境破壊の深刻化が懸念され始めており、そうした中で、「園芸」という視点から人間と自然の関係を見直そうと考えたことにありました。

世界82か国、55の国際機関と国内325の企業や官公庁を含む団体が参加し、会期中の入場者は 2,312 万人で、当時においては過去の特別博覧会史上最高の人数を記録しました。

(2)花の万博における千葉市の出展について

千葉市でも花の万博に参加し、緑と水辺の都市づくりの一層の推進や、政令指定都市に向けてのイメージアップなどのため、屋外展示場の中の「スポットガーデン」と「その他庭園出展」という2つの区分で全期間にわたって出展しました。

スポットガーデンのテーマは、「過去と未来を繋ぐタイムトンネル」。世界的に有名な加曽利貝塚を残した縄文時代は、自然と調和した文化を1万年もの間育み、この縄文人の英知を現代によみがえらせ、未来の発展に活かそうとの願いが込められました。庭全体を覆う鉄製のモニュメントは太古から未来へのタイムトンネルをイメージしました。また、このアーチに縄を張り巡らせた形は、縄文土器をモチーフにしており、庭の中心には高さ約1.3m、最大直径約1.1mという実物(加曽利Ｅ式土器)の約5倍もある大きな素焼の土器を置きました。

千葉市スポットガーデン

また、その他庭園出展は会場中央の「いのちの海」と呼ばれる大池に、「蓮華汀」というタイトルで、オオガハス、中日友誼蓮、舞妃蓮、紅舞妃蓮等の花ハス12種を展示しました。東大緑地植物実験所の指導・協力を得て70鉢の円形蓮鉢に分けて展示され、ここでも見事に花開きました。「70」は翌年の「市政70周年」を念頭に置いて設定しました。6か月という長い会期に合わせて、ハスの開花時期を早めたり遅らせたりするなど苦労したそうです。その甲斐があって、花の万博のメインイベントである、「国際花と緑のコンテスト」において、オオガハスが金賞の中でも特に秀でている「優秀賞」を受賞しました。また、舞妃蓮は金賞、中日友誼蓮は銀賞、紅舞妃蓮も銀賞を受賞しました。

蓮華汀

作業の様子

4　市の花オオガハスとちはなちゃんの制定

(1)千葉市の花「オオガハス」

平成５（1993）年、千葉市が政令指定都市に移行した記念として市の花に「オオガハス」が選定されました。選定理由として、市の木・花・鳥選定実行委員会答申は次の3点をあげています。

①大賀一郎博士が市内花見川区検見川町で発掘した、古ハスの実を発掘・育成したものであること。

②本市の象徴に相応しい歴史性などの由来を有し、美しく端正な花であること。

③公募結果でも最上位であったこと。

同年、市の木・花・鳥の記念式典及びオオガハスの植え付け祭（106か所、318株）が、千葉公園のハス池で行われました。

市の花、オオガハス

(2)ちはなちゃん制定

ちはなちゃんは、千葉市が推進する「花のあふれるまちづくり」のシンボルキャラクターです。千葉公園のハス池に住むオオガハスの妖精で、平成15（2003）年に制定されました。「花の都・ちば」シンボルキャラクターを全国公募し、応募総数 533 点の中から市民投票を経て最多の 1,188 票を獲得して誕生しました。作者はオルカ・グラフィックスの木村直樹氏で、他都市のゆるキャラもデザインされています。

ちはなちゃんの着ぐるみは、平成18（2006）年に完成し、今では年中様々なイベントに引っ張りだこの人気者です。千葉市の花オオガハスだけではなく、花のあふれるまちづくりのシンボルキャラクターとしても活躍しています。

可愛らしい見た目から、幅広い年代に愛されています。小学校では給食で「ちはなちゃんぜリー」が出され、子どもの間でも認知度が高く、イベントでは大人気です。

令和2（2020）年度からは、ちはなちゃんが制定された11月21日を誕生日として、その日周辺の休日にちはなちゃんの誕生日を祝うイベントが開催されています。

イラスト　着ぐるみ

千葉市花のあふれるまちづくりシンボルキャラクター
ちはなちゃん

5　観蓮会とハスまつり

(1)観蓮会

(1)-1　千葉はすの会について

昭和31（1956）年、古代ハスをめでる風流人の集いとして「千葉はすの会」が、千葉公園ハス池の畔で開催されました。会長は、千葉市の百貨店の老舗「奈良屋」の社長であり、俳人としても活躍された杉本郁太郎氏でした。事の始まりは大賀博士が、開花記念日である7月18日に集まろうではないかと皆を誘ったことでした。会則がないという自由な気風で、利益を求めるのではなく、花を愛でること、楽しむことを大切にされていました。この会は、毎年7月18日に開催され、平成12（2000）年の第45回まで続きました。集まった人達の目的は、朝食とご神酒をいただきながら2千年前のハスの花を観賞するだけでなく、大賀博士がご存命中は、ハスに関する様々なお話をお聞きし、博士がお亡くなりになってからは会員の中からどなたかのお話を拝聴することでした。また、俳句やお茶の席も設けられました。

千葉はすの会の様子（昭和43（1968）年7月18日）

(1)-2　メディアでみる千葉はすの会

昭和31（1956）年7月19日の千葉新聞（千葉日報の前身）によると、午前7時という早朝にもかかわらず千葉公園の荒木山に約80人集まり、大賀博士のハスの話や川柳・俳句など、ハスにちなんだ話で盛り上がったと報じられました。

大賀博士が死去された昭和40（1965）年の千葉はすの会の様子はNHKテレビの「スタジオ102」で生中継されました。千葉はすの会は、昭和41（1966）年から、オオガハスを鑑賞する会であるとともに大賀博士を偲(しの)ぶ会として開催されるようになりました。昭和31（1956）年に第一回が開催されてから30年経った昭和60（1985）年、千葉はすの会が毎年盛大に開催されていることを記念して「千葉はすの会30年のあゆみ」が千葉市教育委員会の後援を得て発刊されました。

昭和48（1973）年8月8日

昭和53（1978）年7月17日

(2)大賀ハスまつりについて

(2)-1　大賀ハスまつりとは

大賀ハスまつりは6月の中旬から下旬にかけてオオガハス開花の時期に合わせて行われるイベントです。場所は千葉公園の蓮華亭周辺で、千葉市と市民団体「花びと会ちば」との共催です。このイベントは平成28（2016）年から毎年（令和2（2020）年度、令和3（2021）年度を除く）9日間開催していますが、平成20（2008）年、21（2009）年は「オオガハスの観察会」、平成22（2010）年～27（2015）年は「大賀ハスを観る会」と名前や規模を変えて実施していました。

大賀ハスまつりでは、大賀ハスガイドや蓮華亭で琴や和太鼓、バイオリン等の演奏会、ハスにまつわる講談など、さまざまな催し物を行っています。中でも一番人気はオオガハスの葉を使用した「象鼻杯」。象鼻杯はハスの葉の中心に小さな穴をあけ、葉に酒を満たし、茎を通じてお酒を飲むもので、名前は飲んでいる様子が象の鼻に似ていることに由来しています。ハスを通じて飲むお酒はさわやかな香りがします。大賀ハスまつりではお酒が飲めない人のためにソフトドリンクも用意され、来場者全員が楽しめるように工夫されています。

象鼻杯の様子

大賀ハスまつりのポスター（令和4（2022）年）

(2)-2　花びと会ちばについて

大賀ハスまつりを千葉市と共催している「花びと会ちば」は、平成20（2008）年に「花とひとのネットワーク実行委員会」として発足し、平成27（2015）年に「花びと会ちば」と名称が変更されました。この会は花の活動に関わる市民・企業・生産者等が協力・連携することにより、千葉市における花のあふれるまちづくりの推進を目的にしています。さまざまな立場の人々が集い、それぞれの視点から意見やアイデアを出し合うことで、単体では実現の難しい目標を形にしています。

具体的な活動としては、毎年、千葉公園において「大賀ハスまつり」を千葉市との共催しているほか、市のイベントへの協力、公開講座や様々な講習会や研修会の開催、諸団体への講師の派遣等も行っています。「花びと通信」という会報も発行しており、令和4（2022）年12月時点で38号まで発行されています。

フラワーフェスティバルでの出店協力

(2)-3　YohaS（ヨハス）

平成30（2018）年度から「大賀ハスまつり」の夜の部として始まり、千葉公園で千葉市と一般社団法人千葉公園YohaS 振興会が共催している夜のアートイベント。大賀ハスまつり同様、オオガハスの開花時期に合わせて開催されています。YohaSではオオガハスをテーマにしたダンスや音 楽などのアートパフォーマンスで非日常体験を届けます。

YohaS 写真

6　開花60周年

(1)オオガハスの系統保存

「オオガハス」を将来にわたり絶やすことなく後世に引き継ぐため、開花60周年となる平成 24（2012）年より千葉公園において系統保存を行っています。

系統保存とは、交雑しやすい花蓮の、不用意な交雑（風媒・虫媒など）を防ぎ、衰弱や病害虫などによる喪失を防ぐため、日常管理が容易にできる栽培桝(ます)を使用し栽培を行うものです。

千葉公園の系統保存栽培場（栽培プランターと植替え作業準備）

系統保存の実施にあたり、オオガハスの実を発掘・開花させ、学術的に育成管理している東京大学より平成 24（2012）年4月12日、12株の分譲を受け、プランターに植付け、3年毎に株分け・植替えを行い恒久的に保存を継続しています。系統保存では、交雑を防ぐため、開花後は果托(かたく)を切除し、種子ができるのを防いでいます。

千葉公園の系統保存技術講習風景（植替え作業の様子）

また、オオガハスを栽培する千葉市の公園緑地事務所職員や、分根した施設の管理担当者を対象として、季節ごとの栽培技術講習会を、発芽時期、開花後、植替え作業時期に年 3 回実施しています。

千葉公園の系統保存技術講習風景（植替え作業におけるハス苗の解説）

(2)大賀ハスのふるさとの会

オオガハスが発掘された、東京大学検見川運動場の一角に昭和29（1954）年園芸実験所が設立され、同年3月31日には「検見川の大賀蓮」が千葉県天然記念物に指定されました。昭和39（1964）年、東京大学検見川運動場が東京オリンピックの近代5種クロスカントリーの競技会場となり、オリンピックの開催に合わせて国内外に世界最古の花「オオガハス」をアピールするため、発掘碑を建立し、記念式典を行いました。場内の池にオオガハスを植栽し、同年7月18日には同所に設置された大賀ハス発掘碑の除幕式が、大賀博士並びにオオガハスの実を発見した旧七中生徒の西野真理子さん、千葉はすの会会長の杉本郁太郎氏らの出席のもと執り行われました。

この頃から発掘碑の建立に携わった関係者により「大賀ハスの会」ができ、園芸実験所内でハスの花を愛でる観蓮会が開かれるようになりました。昭和42（1967）年から、花園地区ではオオガハスをシンボルとして、観蓮会・子供祭り行進・納涼祭の3本立てで夏祭りが行われるようになりました。昭和50（1975）年、園芸実験所は「東京大学農学部附属緑地植物実験所」と名称変更されました。

平成16（2004）年、東京大学より検見川の東大総合運動場に、大学の各地の実験農場施設を集約したいと、地元の自治会に了承を求めてきました。ところが平成19（2007）年、一転して緑地植物実験所を西東京市に移転する計画が提示されました。これに対し地元では、オオガハス発掘の地として緑地植物実験所の存続を求める活動を開始し、53,000人余りの署名を集めましたが、平成24（2012）年3月、実験所は閉鎖され西東京市に移転しました。

その後同年5月、東京大学から千葉市が旧緑地植物実験所を借り受け、地域住民がハスを栽培できることになりました。この存続活動に携わった人々が開花 60 周年である平成24（2012）年6月に集まり、「大賀ハスのふるさとの会」が発足し、7月には荒れていた圃場(ほじょう)を手入れし、苦労の末観蓮会の開催にこぎつけました。

東大旧緑地植物実験所での管理活動の様子

地域住民によるボランティア活動も令和 4（2022）年で11年目となり、「大賀博士の遺(のこ)されたハスの文化の伝承と普及」を活動目標に掲げ、①旧緑地植物実験所の管理と花ハスの栽培、②観蓮会の開催、③ハス栽培講習会の開催、④近隣学校の蓮池の栽培指導・普及などの活動

2022 観蓮会の案内ポスター

に会員は汗を流しています。

この活動の中で最も力を注いでいるのが、毎年7月のハスの開花に合わせ旧緑地植物実験所を一般開放する観蓮会で、メンバーは早朝 4 時には開園準備に入り、盛夏の暑さの中多くの方々に国内外100種類の美しく咲くハスの花を楽しんでいただくため努力しています。

観蓮会での視察者への解説の様子

7　都市アイデンティティと市政100周年

(1)ハス守さん養成講座

「ハス守さん」とは、千葉市の都市アイデンティティの地域資源の一つである、「オオガハス」に関する知識や栽培方法を習得し、オオガハスの名所や栽培地における学習・栽培・ガイド・イベント等のボランティアとして活躍する人材を養成することを目的に、平成30（2018）年から始められた講習会です。

「ハス守さん」の活動に必要な基礎知識について、5月から翌年3月迄に全8回の講座を行います。

- **ハスという植物について**
- **オオガハスの由来や生態について**
- **オオガハスの栽培管理、植替え実習**
- **「大賀ハスまつり」への参加**
- **自宅での茶碗ハスの栽培**　など

ハス守さん養成講座（座学）の様子

1年間の講習では、まず座学で基礎知識を習得した後、ハス栽培場で実際にオオガハスをはじめ各種のハスに触れ、その生態を学びます。また、季節毎に千葉公園のハス池を見学し、ハスの1年間の生育状況を観察します。

6月の千葉公園での「大賀ハスまつり」にも参加し、講師による「オオガハスガイド」を実際に見学し、ガイドのポイントを習得します。7月には、東京大学旧緑地植物実験所で開催されている、「花園ハス祭り観蓮会」にて、各種ハスの花の特徴について講師の解説を聞きながら観察するとともに、ハスの花を解剖し構造を学びます。

観蓮会会場での講師による解説風景

ハスの開花時期を過ぎると、日中のハス文化、ハスと仏教、ハスの食文化、花ハスと食用ハスの違い等について座学で学び、総仕上げとして3月にはオオガハスを実際に株分け、植付けの実習を行い、1年間の講座を終えます。

ハスの株分け、植替え実習の様子（写真は、小型の椀バス鉢植え）

これまでに、41名（令和4（2022）年4月1日現在）を「ハス守さん」として認定し、「花園ハス祭り観蓮会」の会場や、「大賀ハスまつり」での活動が、より盛んとなることが期待されています。

ハス守さんによる解説の様子（花園ハス祭り観蓮会会場にて）

(2)学校分根事業

千葉市の花「オオガハス」を広く市民に周知するため、市内の小学校でオオガハスを鉢植えで栽培し、間近で生のオオガハスの花を観賞することで、オオガハスに親しみを持ってもらおうと、平成29（2017）年から学校分根事業を実施しています。これは、千葉公園や花見川区周辺ではオオガハスの花を観賞することは容易ですが、若葉区、緑区の児童はオオガハスに接する機会が少ないため、市内の各小学校で鉢植えのオオガハスを栽培し機会の増加を図っています。

令和3（2021）年度末までに、37校に設置し、間近で生のオオガハスの花を観賞し、手触りや香りを体験しています。

オオガハスの花を写生する小学生（若葉区）

(3)蓮華亭の展示リニューアル

千葉公園蓮華亭展示リニューアル前の展示の様子

千葉公園内にある蓮華亭は、休憩及び学習の場であるとともに、オオガハスに関する資料館として、平成6（1994）年に開設された施設です。開設当初から、オオガハスに関する資料を展示していましたが、約25年以上が経過し、展示物に劣化が見られるとともに、オオガハスが千葉市の都市アイデンティティ確立のための重要な地域資源として位置づけられた現在においては、オオガハスの魅力を伝えるには更に充実した展示内容とする必要がありました。

そこで、市政100周年及びオオガハス開花70周年の節目に合わせ、蓮華亭の魅力向上を図るとともに、オオガハスについて効果的な情報発信が行えるように、令和2（2020）年度から展示リニューアルの検討を開始しました。

令和2（2020）年8月18日の第１回目を皮切りに、合計7回にわたり展示物リニューアルについて議論されました。参加者は大賀ハスまつりを開催している「花びと会ちば」を中心に、さまざまな人が参画したところ、現状の課題として、以下の項目が挙げられました。

- **古く、色あせている**
- **文字が多く、子どもにはわからない**
- **パネルの大きさが小さく、見にくい**
- **第一印象として残念な印象を受ける**
- **全般的な内容で、「千葉」が PR されていない**

これを踏まえ、時代に合ったデジタル装置の導入と「千葉市」のオオガハスを強く意識した展示内容にしたいという考えにまとまりました。

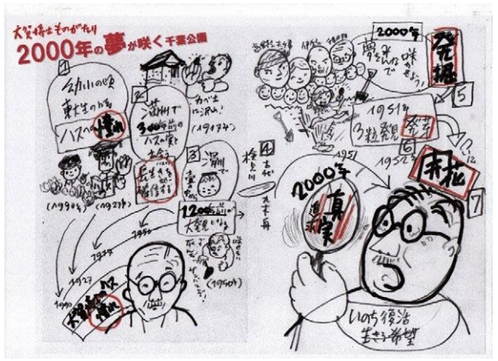
展示テーマは「千葉公園には2000年前のハスが咲いています」です。

具体的な方針としては、「2000年」という時のすごさを強調するとともに、大賀一郎博士の「古代ハスを見つける。そして咲かせる」という情熱・信念を伝えること、オオガハスの発祥地は千葉市であるということを内容として盛り込むこととしました。また、展示内容は小学生やファミリー層、オオガハスのことをよく知らない人を対象に、わかりやすく興味を持てるように工夫する必要があるという意見も出ました。

これらの話し合いを踏まえ、実現性や効果も考慮し、完成イメージ図（写真下）を作成しました。

令和3（2021）年度から展示リニューアルに取りかかり、令和5（2023）年3月に完成する予定です。

リニューアル前の展示物



花びと会ちば　森　淳氏のイメージスケッチ

完成後のイメージ（令和5（2023）年3月予定）

第3章

大賀ハス開花70周年記念事業

記念講演

万葉の花

元NHK理事待遇アナウンサー
加賀美 幸子氏

万葉集は その時代に生きた人々への取材

本日は大賀ハス開花70周年記念フォーラムにご関係の皆様、会場の皆様とご一緒させていただき、大変光栄でございます。奈良時代に編纂され、その後も愛され続けている「万葉集」のハスの和歌を皆様と一緒に確認しながら、本日の講演会のタイトル「万葉の花」の話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私は、放送人として報道、教育、教養、情報、その他たくさんの仕事をしてまいりましたけれども、NHK を退職後すぐに千葉市女性センター（現千葉市男女共同参画センター）に参画させていただきました。センターは当時まだスタートしたばかりで、本当にみんなで力を合わせて進んできました。同時に、ラジオ深夜便、NHKアーカイブス、短歌や俳句の番組、ドキュメンタリー、大河ドラマも放送しておりました。

古典と漢詩の放送は長年続けており、今年度は「古典講読 “歌と歴史でたどる『万葉集』”」東京大学の鉄野昌弘先生の解説で私が朗読しています。万葉集は難しいとおっしゃる方が多いのですが、或る意味では易しく、楽しく、人間の生き方がしっかり見えて来る歌の世界です。私は万葉集もその他の古典も大事な「取材」として読んでいます。いつの時代でも、人々には悲しいドラマがあったりうれしいドラマがあったり、その中でどう生きていたか、全く今と同じですね。大変興味深いと思っています。

古典作品として、ただ朗読だけをする人もいますが、その場合、いくら上手に読んでも中身が全く伝わってきません。ですから、学校の先生や俳優さん、ナレーターさんなどからそういう読み方で万葉集を聞きますと、子どもたちも若い人たちも古典に親しむことができないと思います。せっかくの古典なのに、寂しいことです。難しいものではなく、本当に普通のことが描かれていて、今と同じだなと驚くことも多く、そういうことで、今日は万葉集と花の取材報告をさせていただきます。

万葉集にみるオオガハス

オオガハスにつきまして、私は千葉市女性センターに参画した時から、花びと会会長の仙波慶子さんから折に触れてオオガハスへの思いや活動のご様子を伺ってきました。４首の万葉集からハスを見てみたいと思います。

長歌１首と短歌４首を見ていきましょう。まずは長歌「み佩かしを 剣の池の 蓮葉に 溜まれる水の ゆくへなみ 我がする時に 逢ふべしと 逢ひたる君を な寐ねそと 母聞こせども 我が心 清隅の池の 池の底 我れは忘れじ 直に逢ふまでに」です。この歌はとても優しい歌で、「み佩かし」は「剣」の枕詞です。剣の池のハスの葉に溜まった水のように、どうしていいか分からない。どうしようかなと思っている時に「お逢いしなさい」というお告げがあったので、私はそのお告げによって逢った君だけれども、共に寝てはいけないとお母さんは言う。でも、清隅の池の底のように深く、私は直接逢うまであなたを思っていますよ、というなかなか素敵な恋の歌です。

次に、短歌「蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家にあるものは芋の葉にあらし」です。「う」は今の「い」と同じですから、「うも」というのは「いも」のことですね。ハスの葉というのはこんなに素敵なものなんだな、でも自分（意吉麻呂）の家にあるのはサトイモの葉のようだと。「うも」は「妹」の「いも」、女性の「いも」にも通じます。ですから、「ここにいる女性たちはとても素晴らしいけれども、自分の家にいる妻の方がなじみ深くていいんだよね」という意味でもあるんです。なかなか深くて優しく、洒落た歌ですね。

それから、「勝間田の 池は我知る 蓮なしと しか言ふ君が 鬚なきごと」。「蓮」は昔「はちす」と呼んでいました。「勝間田の池のことを、私は知っているよ。そこに蓮はないのかとあなたは言うけれど、あなたにひげがないのと同じように、池に蓮はありませんよ」。女性の歌ですけれども、さっぱりとしたユーモアがある歌だと思いますね。最後は、「ひさかたの雨も降らぬか蓮葉にたまれる水の玉に似たる見む」。ハスの葉に溜まる水玉のことを思っているんですね。ハスの葉に溜まった水が玉のように光るのを見たいよ、という気持ちですね。

この４首からはユーモアと優しさが伝わってきます。でも、平安時代からは仏教色が強くなってくるわけです。もともとハスはインド原産ですから、お釈迦様につながる神秘性を持っているんです。まずは千葉市の花、オオガハスに関する４首をご紹介いたしました。

夏の花　藤と百合

万葉集は奈良時代に作られた日本最古の和歌集で、130 年の間に詠まれた歌はおよそ 4500 首もあります。政治、社会、家族、恋、悲しみ、苦しみ、喜びと、さまざまなテーマがあります。4500 首もあるので、読みたいのにどこから入っていけばいいのか分からない、そういう方が本当に多いです。今回は「花と万葉」というテーマをいただきましたので、夏、秋、冬の季節に沿って、花を取り上げてまいります。

まず「藤」です。平城京の都を彩り、美しく香り高く、そして何より生き方が魅力的な花です。「藤波の花は盛りになりにけり平城の京を思ほすや君」。これは大伴四綱の歌で、「藤の花が波打つように盛んになりましたね。奈良の都をあなたは恋しく思われませんか」という意味です。四綱は大宰府の役人です。宴会の席で藤の花の盛りと奈良の都の繁栄を重ねて

歌っています。都から離れて遠く九州、大宰府まで来ている仲間に、「都のことが恋しく思われませんか」と問いかけているんですね。大宰府は九州一帯を治めて外からの侵入を防いで国土を守る重要な任務でした。役人たちは折に触れて集まり、気晴らしに歌を詠むために宴会を開いていたんですね。「令和」の出典になった梅花の宴もこういう宴だったわけです。

藤の歌を歌ったとき、そこには大宰府の長官で、万葉集を編纂した大伴家持の父である大伴旅人がいました。旅人は晩年になってから大宰府に赴任してきたんですけれども、やはり奈良の都が恋しかったと思います。作者の四綱はそういう旅人の気持ちをこの歌に込めたんですね。旅人はその歌を聞いてこんなふうに言っています。「我が盛りまたをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ」。これは、「私の盛り、元気さ、勢い、立場、これは戻ってくるだろうか、この年になって。いや、もう奈良の都は見ることはなく終わってしまうかもしれない」という悲しみを歌っています。気持ちが伝わってきますね。

万葉集には藤の歌が 25 首ありますが、その半数以上に「藤波」という言葉が使われているのです。「波」ですから、波のようにうねりながら、他の木に絡まって木を上っていって花を咲かせる。藤はもともと自立できないんです。ですから隣の木、周りの木に絡まって生きていくという習性なんですね。自分自身は立つことができないけれど、隣の木に絡まりながらつるを伸ばして木の上を目指すのです。藤のつるは昔から身近にあって、山で木を切って降ろすときに木をまとめたり、家を建てるときに柱と梁を結びつけたり、なくてはならないものでした。元々力がなくても、他から力を借りてつるを伸ばして花を咲かせることができます。「やればできる」というメッセージ性があって、私はとても好きです。この万葉集の歌から藤がさらに好きになりました。

次に「百合」ですが、日本に自生している百合はおよそ15、6種あると言われています。「あぶら火の光りに見ゆるわが縵さ百合の花の笑まはしきかも」。これは大伴家持の歌です。「灯火の光の中に見える私の蔓(髪飾り)。この百合の花のなんと微笑ましいことだろう」という何気ない歌ですが、なかなか意味があります。家持が越中（今の富山県）の国守として赴任していたとき、部下が開いた宴で詠まれた歌です。この宴の主はその日の趣向として、百合の蔓をみんなの頭に用意したのです。それに対して家持は歌で感謝の気持ちを表したわけです。直接の百合の花も素敵だけれども、明かりのなかでゆらゆら輝く百合が素敵だな、ありがとう、そういう気持ちなのですね。なかなか素敵な歌だと思います。百合の花飾りから盛りの植物の生命力をもらって、みんな元気になるのです。「百合の花の笑まはしき」には、百合の花がほほ笑む様子をみんなが語り合う宴の楽しさが盛り込まれていますね。

そして、万葉集には百合の歌が約11首あり、その中の多くの歌で「さゆり」と「さ」が付いています。「さ」という言葉は古代では神聖さや清らかさを表す接頭語だったのです。ただの百合ではなくて「さゆり」と詠まれていることは、当時、人は百合に対して特別な思いを抱いていたのだと思いますね。今でも「歩く姿は百合の花」と言って、その清らかな姿と香りには現代の私たちも魅力を感じますね。

秋の花　撫子と萩

秋の花は「撫子」です。「野辺見れば撫子の花咲きにけりわが待つ秋は近づくらしも」。この歌は詠人不知です。撫子は夏のころから咲いて秋に先駆けて咲く花で、万葉の時代から親しまれてきました。撫子は「子を撫でる」と書きますね。姿優しい可憐な花にもかかわらず、カンカン照りの河原にもキラキラと平然と咲く真の強さがあります。カワラナデシコは私も大好きな花ですね。

万葉集に撫子が登場する歌は26首あります。そのうち、不思議なことに大伴家持の歌が 11 首もあるのです。「秋さらば見つつ思へと妹が植ゑし屋前の石竹咲きにけるかも」は、「秋になったら偲んでくださいと妻が植えた撫子が咲いたよ」と亡くなった妻を偲ぶ家持の気持ちを詠んだ歌ですね。「なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ」。この歌は「あなたがなでしこの花であったらいいのに。そうしたら毎日毎日手に取って慈しまない日はないであろうに」という意味で、なかなか素敵な歌です。でも家持が求めていたのは、撫子のように優しくて芯の強い女性だったのだと思います。

枕草子の中で、清少納言は「草の花はなでしこ」と冒頭できっぱりと詠んでいます。大和なでしことはこのカワラナデシコのことですね。一見弱々しく見えますけれども、なんのその、しなるように強く、折れたりしない。跳ね返す強い力がある。それこそ大和なでしこと言われる所以ですね。大和なでしこはもう古語になっているんじゃないかと思っていたんですが、アテネオリンピックのときにサッカー日本女子代表の愛称が「なでしこジャパン」でした。とても新鮮でしたね。日本を代表する女子チームにふさわしい愛称でした。日本の女性の強さは万葉の時代から変わってないなと。中身は強く、見かけは優しく見えるけれども、いやいや、というのが大和なでしこじゃないでしょうか。

さて、万葉集の中で最も多く歌われているのが「萩」で、140首あります。「秋の野に咲きたる花を　指折りかき数ふれば　七種の花。萩の花　尾花　葛花　瞿麦の花　女郎花　また藤袴　朝貌の花」。山上憶良の有名な歌です。「指折り」で「およびおり」と読みます。朝貌は秋、これは桔梗のことですね。「秋の野に咲きたる花を　指折りかき数ふれば　七種の花。」ここまでが和歌です。この後の「萩の花　尾花　葛花　瞿麦の花　女郎花　また藤袴　朝貌の花」は旋頭歌になります。この旋頭歌の筆頭が萩の花ですね。

「わが岡にさ男鹿来鳴く初萩の花嬬問ひに来鳴くさ男鹿」。これは大伴旅人の歌ですけれども、「家の近くの丘に男鹿が来て鳴いているよ。初咲きの萩の花を妻として求婚にやって来て鳴く男鹿よ」という意味です。「嬬問ひ」は男性が女性に求婚することですけれども、ここでは男鹿が咲き始めた素敵な萩の花に近寄って鳴く姿を求婚していると見立てて歌っています . 旅人は奈良の都から家族を伴って大宰府に赴任しますが、このとき長年連れ添った妻を病気で失います。旅人は亡き妻への思いを13首の歌にしています。「わが

岡に」の歌には、悲しみに暮れるだけではなく、表現者としての力が感じられます。「さ男鹿来鳴く」「来鳴くさ男鹿」とリズムを繰り返しています。妻を亡くした思いを歌いながら、ただ沈み込んでしまわないで客観的に歌を詠んでいますね。

それから、「秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に」という歌もあります。「秋風が涼しく吹くようになったよ。さあ、馬を並べて行こうよ、萩の花を見に」という意味です。詠人不知ですが、馬に乗れるということは、庶民ではないかもしれませんね。彼らは男性ですよ。「馬を並べて」ですから、一人じゃない。男性が何人か連れ立って萩を見行こうよというんですね。日本人ならではの感性で、奥ゆかしい風習だと思います。

植物学の上でも人々の交わりの上でも非常に興味深い植物、これが萩です。万葉の時代、日本人は中国から渡ってきた梅などに心惹かれるのですが、梅を大事にしながら、暮らしの中にあった日本の身近な花に親しみを持ち続けたんですね。小さくて強い萩の花を愛でたのは日本人の特徴ですね。万葉集に詠まれた植物の数はおよそ1500ですが、その中で萩の歌は 1 割近くです。ということは、当時の人々が本当に大事に思っていた花なんですね。万葉集の萩の歌には人々の暮らしが詠み込まれているように感じます。

冬の花　椿と梅

次は新年、「椿」です。緑の葉を持ち、厚みがあってつややかで真っ赤な花を咲かせる椿は、色の少ない季節に春を告げる花です。「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思はな巨勢の春野を」。坂門人足という人の歌ですね。昔は、椿が野山に群生して赤い花が点々とあるという状況を眺めていたんだなと思いますね。冬から春までの色の少ない季節に咲く椿は、緑の葉と赤い花で輝きを放ちます。皆さんご存じのように、花は散らないでポトリと落ちるんですね。落ちた風情にも趣があって、咲き始めから落ちた後まで大変長く楽しめる花です。この椿も、櫛や斧の柄にしたり、種を搾って椿油にしたり、本当に葉っぱ、花、種、余すところなく暮らしに役立てられてきました。そして、寒い季節に緑の葉を保って真っ赤な花を咲かせるその生命力、それも人々に愛されたと思いますね。椿という字は「木へん」に「春」です。実は中国ではこの字はセンダン科の落葉樹でチャンチンという名前の木なんだそうですが、万葉仮名として日本は「椿」と充てているんですよ。ですから、この字に対する想いが伝わってきます。

そして「梅」です。「我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも」。これも大伴旅人です。「私の庭の梅の花が散っているよ。天から雪が流れてくるよ」という意味です。梅は、当時の人々が憧れて、日本の文化に大きな影響を与えてきた花です。梅の花が咲くともう春が来る、冬じゃないよ、そんな思いを込めた「春告げ草」ですね。万葉集にはおよそ120首歌われています。桜は40首なんです。当時の梅に対する人気の高さが分かりますね。万葉集の歌を見ると、梅はみんな白なんですよ。「馬並めて多賀の山辺を白栲ににほはしたるは梅の花かも」という歌もあるんですが、馬を並べて高い山を進んでいくと、真っ白に染め上がっているという意味です。当時の梅は一重で白だったそうです。何色にも染まらない清純無垢の色と形。新しい年にぴったりでしたから、みんな好きだったのですね。

梅は有用植物ですから、最初は食用や薬用として利用されました。万葉人は、寒い冬に花を咲かせる梅に強い生命力を感じたのです。袂に入れたり髪に挿して飾ったり、身に着けることでその活力にあやかろうとしたのです。どの植物もみんなそうでした。身に着けました。

梅の花を観賞するという文化は万葉時代に広がりましたが、最初の記録が万葉集の「梅花の宴」です。「令和」の元になった梅の花の宴。これが天平2年、730年のことです。宴が開かれたのは大宰府。旅人は梅花の宴「わが園に」の歌を歌いました。雪は白、梅はまさに白。この歌は旅人の代表作の一つです。宴に集まった人たちが咲く梅の美しさを歌う中で、旅人は庭に散る梅の風情を詠みました。漢詩を下敷きにした巧みな表現で、私たちがいま読んでも実に新鮮です。旅人は庭に舞ってくる梅を天から降ってくる雪に見立てて天と地をつなぐスケールの大きな歌に仕上げたのです。旅人の歌をきっかけにして、一堂それぞれ趣向を凝らした歌を詠んで互いに心を通わせました。この歌の32首が今日まで大切に受け継がれています。

本当は桜もお話ししたかったのですが、やはり万葉集なので、梅でとどめました。万葉の時代、梅は中国からもたらされた最先端のかっこいい花だったのです。それが平安時代の古今和歌集では桜が 75 首で梅が 22 首になり、さらに御所に植えられていた左近の梅が左近の桜に逆転します。先進国中国の文化を受け入れてきた時代から、日本独自の文化を見直そうという時代に入ってくると、次第に桜が日本人の心の花になっていきました。これもなかなか面白いですね。

花を見ていると本当にいろいろなことが見えてきます。万葉集にはたくさんの花が登場しますので、花を通して万葉集に近づいて、さらに深入りして楽しんでいただければと思います。皆様どうもありがとうございました。

プロフィール

昭和 38（1963）年、NHK入局。ニュースから古典まで幅広く担当。現在もライフワークとして、万葉集、源氏物語、枕草子、徒然草その他、古典の原文朗読を中心に、さまざまな活動を展開。
「千葉市男女共同参画センター名誉館長」「NPO 日本朗読文化協会朗読名誉会長」「放送人の会理事」他多数の公職も務める。著書に「こころを動かす言葉」「ことばの心・言葉の力」他。

基調講演

古代蓮の中の大賀ハス

元京都府立植物園園長
金子 明雄氏

ハスことはじめ

皆さんこんにちは。はるばる京都からやってまいりました。今朝、千葉公園のオオガハスを見させていただいたんですけれども、非常にきれいに管理されていて感激したところです。70 周年を迎えられるほど営々と管理を続けてこられているというのは、大変な労苦と、また地域の皆さんの支援があってこそじゃないかなと感じました。今日は大賀ハス開花 70 周年に当たって、「古代蓮の中の大賀ハス」をテーマに話を進めてまいりたいと思います。

まず、オオガハスを知るためにはここを知っておいていただきたいという点を簡単にご紹介させていただきます。

ハスはハス科ハス属の水生植物で、ハス科の中には 2 種類あります。昔はスイレン科に入れられたことが多々ありましたが、今は DNA 分析結果から独立しています。ハスは、主に紅や白の花を咲かせるアジア系のハスと、南北アメリカに分布する黄色の花を咲かせるキバナハスがあります。ハスの元になっているのはスリランカです。ハスはスリランカ語でネルンボ・ヌキフェラといいますが、ネルンボは「ハス」、ヌキフェラは「堅い実」という意味です。黄色いハスはネルンボ・ルティアといい、ルティアは「黄色い」という意味で、学名、世界共通の名前になっています。

アジア圏では、ロシアのアムール川流域に絶滅危惧種のハスが自生しています。緯度は45度、宗谷岬（そうやみさき）の辺りの高緯度の地域です。大賀一郎博士が最初に関わったのは大連の普蘭店（ふらんてん）ですね。黄色系のハスは、アメリカのバージニア州に最も黄色いバージニア蓮、ミシシッピ川の辺りに王子蓮系のウイスコンシン蓮があります。

育成されたハスの種類は3000を超えるくらいになっています。ハスは、ハスの実から育成すると新しい品種として名前を付けるので、どんどん増えていきます。ハスの原産地は、インドという説もありますが今のところ未定です。日本のハスについては、自生説と渡来説があります。自生説は、恐竜の化石で有名な福井県池田町辺りで 7 千万年前のハスの葉の化石が出ていることが根拠になっています。渡来説では、鑑真和上らが中国から持って来たことなどからです。

次にハスの実についてですが、非常に堅く長寿です。長さ 1.5cm、重さ 1 ～ 1.5g くらいのラグビーボールを小さくしたような形です。6 月下旬から 8 月中旬頃にかけて、品種にもよりますが、池であれば 30cm を超える大きな花を咲かせます。花は 3 日間開閉して 4 日目に散ります。ハスは早朝でないと全開している様子を見ることができないのですが、梅雨前でしたら 10 時前くらいであれば全開している様子をなんとか見ることができます。

ハスの原産地に話を移しますと、発掘された化石で一番古いものは少なくとも約 1 億年前のものになります。1 億年前というと恐竜が繁栄した時代で、恐竜がいて、足元の方にピンク色のハスの花が咲いている様子がロシアの博物館で展示されています。

アジア系のピンクのハスと南北アメリカの黄色いハスにいつ分かれたのかというと、有力なのはゴンドワナ大陸説です。しかし、最近の中国の報告書で 150 万年前じゃないかという説も出てきていまして、いよいよその部分が話題になるのかなと思っています。

現存のハスは化石で出土したハスの様子とよく似た形をしています。基本的にハスの化石は北半球から出ています。原産地にはエジプト説、インド説、中国説があるのですが、化石が出ていないので決定打になっていないのかなと思います。アジアの赤いハスの原産地については未定なのですが、それぞれの説についてよく言われるのは、スイレンとハスを混同したんじゃないかということです。「フローラの神殿」という植物図鑑に赤いハスと黄色いハス、その奥の右下の方に小さくピラミッドが描かれています。これがゴンドワナ大陸の黄色と赤の分かれる分岐点とはまた違う意味で重要な話になるんじゃないかと思います。ポンペイの遺跡で紀元前 2 世紀末のナイル川の風景を描いたものがあり、そこにハスのつぼみと鳥が乗っている果托が描かれています。まさしくこれはスイレンじゃなくてハスです。紀元前 2 世紀ですから、エジプトという決定打は出せないんじゃないかなというところです。

インド説は、仏教の世界がハスと大きく関わっており、紀元前3千年前に地母神像の髪がハスの花で飾られているということで、これも原産地だと言いきれないと感じます。もう一つは中国説です。これはハスの花粉の話から来ています。紀元前5000年～ 4500 年頃の地層から出土しており、ハスが出てきたのは 1 億年前といわれていますから、まだまだそこに到達していません。いまのところ、この 3 つの説が並行しているという状態です。

オオガハスとは

次に、オオガハスを説明しておきたいと思います。大賀一郎博士は明治生まれの植物学者で、中国大連の普蘭店（ふらんてん）でハスを研究されました。古いハスの実の研究で東大の理学博士号を取っておられます。博士号を取った後は、奈良の當麻寺（たいまでら）の曼荼羅（まんだら）がハス糸で織られたということで、それが本当にハスの糸かどうか調査をされています。昭和25（1950）年には国学院大学教授から、千葉

県香取郡滑川町（現・成田市）から出土した須恵器の中に入っていた推定1200年前のハスの実１粒をもらい受けました。大連のときは500年前のハスの実だと言っておられたわけですから、それは驚かれたと思います。それが発芽して育てていたんですが枯れてしまい、３日ほど落ち込まれたということが記録されています。それでもなんとかハスの実を得たいということで、この検見川の地で掘っていくということになるわけですね。なんとか発掘期間を延ばしたところ３粒の実が出たということです。この実も非常に大事でして、実からも品種の違いが分かります。オオガハスは実の重さが１g前後、縦横の比率が 1.5 前後です。本当の品種かどうか、データを比較すれば確認できます。

話を戻しますが、博士は昭和26(1951)年5月の連休のころに３粒の実を発芽処理されました。結果的に3月30日に発見した実が千葉県農業試験場で順調に育ち、翌年掘り起こされることになるわけです。昭和 27(1952)年4月7日に3株の蓮根を得ました。大きいもの、中くらいのもの、小さいものがそれぞれ千葉県の3か所で植えられております。一番大きいものが東大の厚生農場へ、その後伊原茂さん宅にお願いしたというものになります。中くらいのものが千葉公園、小さいものが農業試験場と報告書が残っております。伊原氏宅のものが順調に育って、同年7月18日に初めて開花しました。開花2日目に淡い紅色、花弁数が24枚あったということです。米国・『LIFE』週刊版（11月3日号）に、「世界最古の花、生命の復活」ということで掲載されています。

さて、大賀博士が2000年前のハスの実だと解釈された部分について話をしたいと思います。博士はなんとかハスの実の年代を知りたかったのですが、当時だと１回分析するのに 35 個の実が必要でした。３粒とも発芽処理してしまっていたため、同時に出土した丸木舟（カヤの木）の断片を昭和27（1952）年にシカゴ大学原子核研究所ウィラード・リビー博士に送り、年代測定を依頼しました。分析の結果から 3075 年±180年前ということだったのですが、ひょっとしたらカヤの木がハスの実よりも1000年ほど古いかもしれないということで、安全を取って 2000年というふうにしたと記録に残されております。この分析は、生きた化石といわれるメタセコイヤの種を中国で入手し、その種から育成した苗を日本に提供した米国カリフォルニア大学チェイニー博士を介して実現したのですが、その前年にチェイニー博士と大賀博士が知り合っていたおかげでスムーズに話が進んだのだと思います。

オオガハスの形態については、大賀博士の後を引き継がれた阪本祐二先生、北村文雄先生が昭和47 (1972) 年に共著で出された「花蓮」に、花径は 27cm 前後とあります。花弁はやや細い船底型が特徴です。それから、水分や養分の通り道を「条線」というんですが、オオガハスではこれがはっきりせず、見えにくい。オオガハスといいながら条線があるものが展示されているところが割と多いです。葉っぱはツルツルしており、これも大きな特徴です。葉の表面の表皮細胞に0.01ミリの小さな突起が出ており、この部分にワックスが載っていて水をはじくわけです。異常を起こすとハスの葉っぱはザラザラになります。一つの原因として肥料のやりすぎが考えられます。

古代蓮の中の大賀ハス

次に、「古代蓮の中の大賀ハス」という点ですが、古代蓮の定義についてはまだ探し出せておりません。大賀博士が大阪で見つけたハスを「原始蓮」と名付けられましたが、単なる小さい花をイメージされたのかなと思っています。「古代蓮」という名称は、大賀博士が普蘭店で発掘した約1000年前の実を開花させ、そのハスを「フランテン蓮」、別名「中国古代蓮」と呼んだのが最初です。名称が一般化するのは、埼玉県行田市で、昭和20(1945)年頃に見られたハスが昭和35(1960)年に行田市の天然記念物に「古代蓮」として指定され、そのときに古代蓮という名前が趣味家の間で広がりました。

古代蓮の花の色について、今まではハスの花の色については、赤・白・青・黄・爪紅・斑・黄紅・底紅が伝えられてきています。ただ、青と底紅については未確認です。ピンクのハスの花の色について、花の色は何のためにあるのかというと、よく昆虫をおびき寄せるためだという話があるんですが、昆虫の研究者によると、昆虫の目の感度はそれほど良くないそうです。それではなぜかというと、植物が進化の過程で陸上に上がった際に紫外線を吸収する色素を獲得し、細胞を守っているという解釈がされています。花にブラックライトという紫外線だけを当てると、可視光線では目立っていなかった雄しべや柱頭が黄色く鮮やかに光っています。花弁は逆に目立っていないので、花の色で虫を呼んでいるのではないという一つの根拠になるんじゃないかと思います。

花の色を担っている四大色素は、一番多いのはフラボノイドで、次がクロロフィル、つまり葉緑素です。それからベタレイン、カロテノイド。クロロフィルが分解されるとカロテノイドの黄色が見えてきます。アントシアニンもよく聞かれますが、だいだい色から青色の中心的な色になります。アントシアニンはハスの赤、ピンクで検出されていますが、キバナハスを含む白と黄色の花ではほとんど検出されていません。フラボノイドは全ての花で検出されています。これが紫外線対策の元になっている部分になるのかなと思います。白い花弁について、白い色素を出すにはどうしたらよいかと時々聞かれるんですが、花弁の表面や細胞の中の空気が乱反射し、いろんな光が合わさると白くなるというだけなので、白い色素があるというわけではありません。

結局、昆虫を遠くからおびき寄せているのは「香り」じゃないかと考えられます。香りを出すのに花色が影響しているんじゃないかと思い始めたのは、資生堂さんの研究者の「蓮の香り」という分析です。その結果から、ハスの場合、白い花より赤い花の方が香りが強いと考えられ、交配を重ねると香りが少なくなっていることが分かります。

江戸時代の農書に、白と赤を一緒に植えたら白が消えるから注意しろという言い伝えが残っています。以上のことから、白いハスは赤いハスが変異して生じたものと考えられ、赤色のハスが原始の蓮と推測します。

オオガハスのDNA

次にオオガハスを含めてDNAの話になります。全ての生物はさまざまな形態や形質を親から子に伝えていきます。国内で栽培されている代表的な220品種の花ハスのDNAを分析した結果、「キバナハス」「黄紅・黄白系」「斑系など」「古代・和蓮系など」「その他」の５つのグループになり、オオガハスを含む古代系は一つのグループになりました。黒龍江紅蓮（こくりゅうこうこうれん）、中国古代蓮、大賀蓮、和蓮系が同じグループで、割と近縁関係にある仲間と言えるわけです。また分析結果から、千葉県農業技術センター由来、十日町市弁天池由来、阪本祐二氏由来の３系統のオオガハスについて、DNA分類上の位置は独特で、真偽論争時に豊田清修氏が指摘した「どこにでも見られるハス」ではないことが明らかになっています。

ただ、３系統のオオガハスは、遺伝的には非常に近いグループに入ってはいるものの、わずかな違いが生じており、25か所のうち３か所で遺伝子型が異なっていました。同一にならないということは、クローンでない又は一部変異を起こしたかということになりますが、生物の世界では2000年の期間に遺伝子の変異を起こすことは考えられないため、実生で育成されたものと考えられます。実生で育成した場合でも、オオガハスは他の品種がない場所で実を取って育成した場合、花容はほとんど見分けがつきません。これは、オオガハスは遺伝的な固定が進んだ状態であることを示しています。千葉公園では、実がなる花托の部分を早期に取り除くという素晴らしい営みを40年も続けてこられているということで、感服いたすところです。

一方で野生のハスはというと、単純に言えば人の手がかかっていないハスのことで、古来のハスの可能性があります。ロシア、中国、オーストラリア、北米、日本の５つを紹介したいと思います。ロシアでは絶滅危惧種の赤系の蓮。中国では北部の黒龍江中流域（北緯 45 度前後）に赤系の蓮。オーストラリアは大陸の北部中央、カカドゥ国立公園の湿地帯に赤系の蓮。北米はミシシッピ川下流域に黄色い蓮。そして日本における和蓮、赤系の蓮。ロシアは平成21（2009）年に南先生に連れて行っていただきました。このときはボートを出して、葉っぱを引き抜いたら3m20cmの長さの茎が取れまして、そんな水深のところから伸ばしているのかとびっくりしたことがあります。

日本における古代蓮については、実から分析されていないのではっきりしていません。2000 年前頃のオオガハスから、1600年前頃の原始蓮、500年前ごろの印南蓮などがあります。結果的に、日本における「古代」といえば一般的に奈良から平安あたりをいい、およそ1000年以前のものを「古代蓮」と考えるのが妥当かなと思っています。

古い形態とされるものを古代系のハスからみてみると、花のつぼみ、花弁は細長く、比較的濃いピンクの一重のハスと考えられ、実の形態は、重さ１g前後で長楕円形（横縦比 1.5 前後）です。また、花托の表面の形状は、いわゆる和蓮は一部盛り上がりがあるものの平坦で、オオガハスは柱頭部分を含めて盛り上がるのが特徴です。この点については中国古代蓮、ロシア蓮、黒龍江紅蓮など中国北部からアムール河流域のハスも同様の形態を示しています。DNA分析からも系統的に近いと考えられ、より古い一群ではないかと考えられます。可能性としては、日本海が開くのが約2000万年前で、日本列島が大陸縁にくっついていたことからその種が分離してきたものか、新たに導入されたものかということが考えられます。

最後に、江戸期に交配された雑種で非常に丈夫な桜蓮（おうれん）というハスがあります。江戸期から残っている品種なんですが、江戸期から伝わる赤い一重の条線があるハスは形態的にはほぼ一緒で、京都府立大学の久保中央先生に調べてもらったら全く一緒でした。ひょっとしたら大名屋敷で育成されているときに、ハスは非常に大切でしたから、枯れると大名にバッサリ切られないために花を咲かせておこうとして、強い品種が残ったのかなと、ちょっといたずらな想像をしたりしています。白いハスで行基蓮という名前の品種がありますが、これはオオガハスの実から育成されたものです。周りに違う種類のものがあれば、こういう白いハスも生じる良い例だなと思っています。

今日は朝６時前に千葉公園に出掛けましたが、大勢の方がいらっしゃっていて、千葉の方はとても熱心だなと感動いたしました。千葉市さんは保存のための取組みをどんどんされていると聞いております。系統保存を続けるのは苦難を伴いますが、ぜひとも継続していただき、地域の皆さんの活動も大きな力となって支援していただいて、今後も百年、二百年、いや千年と将来につないでいってほしいなと思います。植物に関わる者としても、一つの種類を将来に残していくというのは大変な話でして、何とかこれからも営々とオオガハスの咲き乱れているところを見たいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

大賀ハス
開花70周年
パネルディスカッション

オオガハスを活かしたまちづくり

開催日／令和4（2022）年6月25日（土）
会　場／千葉市生涯学習センター　2階大ホール

斉藤 久芳
花びと会ちば

阪本 尚生
和歌山大賀ハス保存会会長

佐藤 良一
府中市郷土の森公園管理事務所長

南　定雄
蓮文化研究会顧問

神谷 俊一
千葉市長

出席者
（発言順）
敬称略

阪本 尚生（和歌山大賀ハス保存会会長）
佐藤 良一（府中市郷土の森公園管理事務所長）
南　定雄（蓮文化研究会顧問）
神谷 俊一（千葉市長）
◎コーディネーター：斉藤 久芳（花びと会ちば）

斉藤　本日はオオガハスを活かしたまちづくりを基本テーマとして、オオガハスを守り、育て、広め、未来につなげることなどについて話し合いたいと思います。まず、それぞれの立場からこれまでの取組みについてお話しいただきたいと思います。最初に、和歌山大賀ハス保存会の阪本様、よろしくお願いします。

阪本　和歌山県から参りました阪本です。60年間ハスを守っております。私が住んでいる御坊市の隣の美浜町日の岬にオオガハスの咲く大賀池があります。今年は昭和 37（1962）年の分根からちょうど60年で、保存会は昭和 40（1965）年から活動しています。

昭和37（1962）年、日の岬一帯を観光開発することになり、観光の目玉の一つとしてオオガハスを植えようということになりました。千葉市の弁天池から届いたレンコンを大賀池に移植したのですが、池は標高 202 mの日ノ山の谷底にあります。冷たい谷水が流れ込んでその年は咲かず、翌年6月26日に開花しました。7 月の終わりに第一回観蓮会を開き、大賀先生が見えて、観覧者も大勢集まりました。

この時、父親も気合が入ったのか、このハスを中国へ持って行こうということになり、弁天池の果実50粒と大賀池の50粒が、大賀先生の「蓮平和象徴也」の墨書と一緒に中国に渡りました。中国側は大変喜んで、千葉県市川市に住んだこともある中国科学院の院長であった郭沫若さんからお手紙をいただきました。大賀先生と私の所に届いて、当家の家宝になっています。

池は何度も改修を行い、昭和56（1981）年に大幅な改修をして今の池の原型ができました。しかし、谷水の侵入を緩和するために設置された堰が機能せず、依然冷たい谷水が入り込みオオガハスの生育は芳しくなかったために、平成6（1994）年に池を囲う畔波板を設置してようやく生育が安定しました。腐敗病や立ち枯れの危機は何回かあり、最近では、平成27（2015）年に桟橋を作った時に立ち枯れがありました。イノシシによるレンコンの食害もありましたが、檻を仕掛けたので今は入る気配はありません。

保存会では観蓮会を行っています。献花、講話、来賓挨拶のほかに、アトラクションとして日本舞踊と大正琴の演奏があります。地元の先生が作曲された大賀蓮賛歌という曲があるんですよ。目玉は、2 千年前の中国の故事に倣った象鼻杯です。60 年の記念観蓮会も行い、記念誌を刊行しました。去年は、「大賀蓮発見 70 周年記念誌」を刊行しています。100 周年を目指したいのですが、池は大変老朽化していて、どうしようかと思っています。会員も高齢で、私が一番若いくらいです。

去年、「日ノ岬・アメリカ村」というNPOが立ち上がり、オオガハスも活動に入れていきたいということで、大賀池から直線距離で 1.4km 離れた場所に新大賀池を作りました。たくさん咲きました。私も「大賀池日記」というブログを書いていますので、ぜひご覧ください。

斉藤　ありがとうございます。続いて、府中市の取組みについて佐藤様からお願いいたします。

佐藤　府中市の南側には東西に多摩川が流れており、その川縁の郷土の森公園に修景池と呼ぶハスの池があります。府中市の花ハスは、もともとは大賀博士が府中市のご自宅で育てていたものを市が譲り受けたものです。博士は、昭和20（1945）年から 82 歳で亡くなられる昭和40（1965）年までの 20 年間、府中に住んでおられました。その間、昭和26（1951）年に千葉市でオオガハスの種子を発見し、開花に成功されています。博士はご自宅の池と府中中央公園のひょうたん池で花ハスの育成研究をされていました。中央公園は寿中央公園という名前になりましたが、ひょうたん池は現在もあり、オオガハスと舞妃蓮の 2 品種を育てています。

博士は花ハスをはじめ、書籍の他多くの資料を府中市に寄贈してくださっています。一つは郷土の森公園にあるハスの花で、現在約30品種あります。書籍資料は府中市中央図書館に大賀文庫として約6,300冊を所蔵していて、誰でも希望すれば閲覧できます。その他の資料は府中市郷土の森博物館で保管しています。博士の眼鏡やステッキなどの身の回り品から顕微鏡やフラスコなどの実験器具、写真、スライド、録音テープ、

実際の種など、その数は約5,000件になります。

郷土の森公園にはちょっと入り組んだ形の修景池という人工池があり、花ハスは37か所の鉢に植えられています。オオガハスはそのうち4か所でちょうど今頃がよく咲いていますが、一般的には８月の半ばくらいまでです。昨日の段階で、30 品種で花の数が 56、つぼみの数は 256 といったところでした。花の数が 50 を超えると見ごろといっていい状態で、最大で 100 くらいが私どもの池の規模となります。

斉藤　続きまして、東京大学旧緑地植物実験所や蓮文化研究会での取組みにつきまして、南様、よろしくお願いいたします。

南　ハスと私との関わりは、今から 58 年前の東京オリンピックからになります。この時に検見川の東京大学総合運動場でクロスカントリー競技が行われました。オリンピックに先立って、検見川の地で古いハスの実から大賀先生が花を咲かせたことを世界の選手に知っていただこう、ということで、地元の関係者、千葉県、千葉市、東京大学の協力があり、発掘記念碑を作ろうということになったんです。

私どもがこの記念碑の近くの池に種レンコンを植えたのが昭和39(1964) 年の3月25日で、大賀先生が来られて、ハスの植え方を教えてくださいました。先生はこの約 1 年後に永眠されています。記念碑の碑文には、この碑から 300 m先に発掘地点がある、ということが書かれています。

その後、記念碑の周りにハス池を新しく作り、オオガハスを植え付けたら繁茂して、道路からも見られるようになりました。この発掘地点から北西 400 mにあるのが東京大学農学部の、当時は園芸実験所だったんですが、そこにハス池を作って植えたわけです。大賀先生が亡くなられた昭和 41 (1966) 年に、先生が作られていた 11 のハスの品種をいただいて栽培を始めました。

ハスをいただいた時には、ハスの植え方も何も知らず、実験所の中に土を掘り、簡単にビニールシートを敷いて1m50cmくらいの簡易なハス池を作り、土を入れて 10 品種のレンコンを植え付けたんです。すると、夏に隣からビニールを破って芽が出てくることが分かり、これでは品種が混同すると、翌年にコンクリート製のハス池を作ってハスの保存に努めたわけです。

実験所の見本園は、最初は先生が所有されていた 20 品種くらいから始まっています。国内のハスを少しずつ集めて、昭和50 (1975) 年で約40種、平成になると約 60 種と、種類が増えるたびにハス池を増やしていきました。

国内だけでなく外国のハスも欲しいということになり、中国から品種が導入されるようになりました。平成 7 (1995) 年あたりです。中国から約 200 種が入ってきたと思います。千葉県の水郷佐原植物園（現在の水郷佐原あやめパーク）の園長さんと一緒に中国の武漢、北京、上海へ行き、ハスの品種を導入することに成功しました。国内で千葉県が一番花ハスの品種が多いんじゃないかと思います。

一方、成田空港では、世界の方々にも日本のハスを見ていただこうと、今年もハスの展示を始めました。空港にハス池を作ったのは成田空港が世界で初めてです。機会があったらぜひ見に行ってください。

斉藤　続きまして、千葉市における大賀ハスまつりなどの取組みについて、神谷様よろしくお願いいたします。

神谷　私からは、千葉市におけるオオガハスのまちづくり 70 年の歩みを説明させていただきたいと思います。

千葉公園では、昭和 27 (1952) 年に栽培が始まり、翌昭和28 (1953) 年に初めて４つの花が咲きました。昭和31 (1956) 年に古代ハスを愛でる方々の集まりとして、第一回千葉はすの会が開催されています。昭和39 (1964) 年の東京オリンピックでは、検見川グラウンドが会場になりましたので発掘碑が設置されました。昭和63 (1988) 年は開花 35 年ということでオオガハスの記念誌が発行され、パネラーの阪本先生のお父上も執筆されています。

平成に入ると、千葉公園でオオガハスを見る環境が整ってきました。平成 5 (1993) 年に「千葉市の花」としてオオガハスが選定され、千葉公園の綿打池のそばにハス池、観賞用の橋が、平成 6 (1994) 年に蓮華亭が完成しました。平成15 (2003) 年には、「花のあふれるまちづくり」のシンボルキャラクターとしてオオガハスの妖精「ちはなちゃん」が誕生しました。平成17 (2005) 年には「ちはなちゃんゼリー」ができて給食に出るようになり、成人式の「小中学時代の思い出」で必ずトップ 5 に入っています。千葉市の子どもたちは、小中学校からオオガハスに親しんでいます。

平成15 (2003) 年まで「千葉はすの会」がありましたが、平成 20 (2008) 年から「花びと会ちば」が活動を開始し、６月に「大賀ハスを観る会」を千葉市と共催で開催しております。平成 28 (2016) 年には名称を「大賀ハスまつり」に変更して、期間を９日間に拡充しました。昨年、一昨年はコロナで中止となりましたが、今年は３年ぶりの開催となります。

次にオオガハスの国内外とのつながりですが、千葉公園から国内へ分根されたのは令和3年 (2021) 度末で245か所、海外は17か所あります。平成に入ってからもカナダ、アメリカ、韓国、パラグアイ、タイ、スイスの６カ国に分根させていただいており、国際交流に一役買っています。

系統保存については、開花 60 周年の記念事業として千葉市でしっかりと取り組んでおります。東大旧緑地植物実験所から優良な株を譲り受け、パネラーの南先生のご指導の下、千葉公園で系統保存に取り組んでおります。

千葉市は数年前に、加曽利貝塚、千葉氏、海辺、そしてオオガハスを４つの都市アイデンティティに選定しました。この４つを千葉市の中心的

会場を飾ったオオガハスの吊るし雛（千葉市商工会議所女性会が作成）

な地域資源として磨き上げ、市外の皆様に積極的にPRしていくことにしております。

最近の動きとしては、6月の大賀ハスまつりの月間に、夜の部として「YohaS（よはす）」という催しを始めております。椿森コムナ（現一般社団法人千葉公園YohaS振興会）と千葉市の共催で、オオガハスをテーマに光と音楽で演出したパフォーマンスを展開しております。以上が70年間の取組みでございます。

斉藤　皆様ありがとうございました。それでは、これまでの取組みを踏まえ、今後、どこに重点を置いて取り組めばいいのか、再度ご意見を伺いたいと思います。まずオオガハス“もどき”の問題や保存のための新たな取組みにつきまして、阪本様からお願いいたします。

阪本　昭和63（1988）年の千葉市の冊子『大賀ハス』によりますと、国内で107か所、海外で7カ国14か所に分根されています。ただ、無自覚で分根してしまったので他の種が混ざり、オオガハス“もどき”が全国に広がってしまっています。平成12（2000）年頃にこの問題が顕在化してきます。朝日新聞に「大賀ハスの絶滅」という記事が出たのをきっかけに“もどき”を退治しようということになりました。南先生が中心になって対応に当たってくださっていますが、なかなか有効な手がなく、どんどん広がるばかりです。

何年か前に京都のある有名なお寺に行ったとき、オオガハスと称して咲いている花が一目で全然違うものだと分かるということがありました。千葉にはオリジナルのオオガハスがありますが、千葉から離れたところでは、本物のオオガハスがどういうものか分からないのです。私どもは完全に隔絶された所で栽培し、同じ個体同士を掛け合わせているので、できた種はほとんどオリジナルと同じです。新潟県十日町や島根県大田市にもそうした株はありますので、そのハスを一堂に集めてきちんと調査し、本物のオオガハスの見本園を千葉市で開いていただいて、オオガハスはこういうものだということを積極的に情報発信をしていただきたいと思います。

斉藤　正当なオオガハスを育てるための貴重なご提案ありがとうございます。花ハスの栽培には専門家や研究機関との連携や協力が大変重要です。府中市のハス園では、東京大学農学機構に協力いただいていると聞いておりますが、その協力関係などにつきまして、佐藤様からご説明をお願いいたします。

佐藤　千葉市から西東京市に移った植物実験所は、正式名称が東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構、通称は東大農学機構といいます。ハスの見本園もあり、花ハス担当の研究者がハスを育てています。私どものハスが弱ったり枯れたりした時には、東大ハス見本園からハスの苗を送ってもらっています。

府中は、大賀博士から譲っていただいた当初は市民の方も大勢参加されていたんですが、高齢化とともに活動が低迷しました。そこで南先生に教えていただいたり東大農学機構に教わったりしながら、30品種をかろうじて維持しているという現状です。

斉藤　オオガハスのまちづくりには市民参加や市民主導の取組みが必要不可欠です。市民主導の取組みである「大賀ハスのふるさとの会」につきまして、会の設立から関わっておられる南様からお話を伺いたいと思います。

南　オオガハス発祥の地である花園地区は、花見川区検見川町、畑町、浪花町、朝日が丘一帯になります。昭和40（1965）年に大賀先生が永眠された後、私ども園芸実験所では、先生の栽培されていた花ハスをいただき、本格的な保存水槽を作り栽培を始めました。この頃から発掘碑の建設に関わった関係者によって「大賀ハスの会」が開かれるようになり、7月最終の土・日に地域の夏祭りで花園ハス祭りが行われるようになりました。

観蓮会は祭りの一部として園芸実験所時代から始まり、緑地植物実験所へと名前が変わった今日に至るまで続けられています。「花園ハス祭り」が昭和42（1967）年から始まって、今年で55年になります。

その後、観蓮会は受難の時を迎えます。平成24（2012）年、植物実験所が西東京市へ移転するということになり、閉鎖の憂き目に遭うのです。花ハスの半数も西東京市へ移されることになって、地域としては諦めざるを得ない状況に追い込まれました。同年5月、千葉市が東大から借り受け、地域で栽培を継続できることになりました。圃場は荒れていて、2カ月後の観蓮会開催が危ぶまれましたが、関係者の使命感と熱意で開催にこぎつけることができました。

そして観蓮会の開催やハス文化の継承と普及のため、地域のボランティア団体として「大賀ハスのふるさとの会」が発足しました。今では会員も約60人に増えています。ハスが西東京市へ行ってから、ちょうど今年で10年になります。地元では、オオガハスのふるさとはここにしかない、という意気込みで高齢の方から若い方まで熱心にハスの手入れをしています。会では、これからもできる限り地域のために頑張っていこうと活動しておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。

斉藤　続きまして、オオガハスをまちづくりに活かすかすための市民参加や市民との協働につきまして、神谷様からお願いいたします。

神谷　先ほどオオガハスの70年を振り返りましたが、市民の皆様の参加で価値を高め広げていただいたと思っております。今後も、行政だけではなく市民、産業界、学業関係の方と一緒になって進めていきたいと考えております。「大賀ハスまつり」は開催期間を9日間に延長しましたので、さらに充実させたいと思います。オオガハスに関わる方を増やしていくことがオオガハスを守ることにもつながりますので、担い手となる方も増やしていく必要があります。

今年、ちば産学官連携プラットフォームのご協力で、市内の学生に「大賀ハスまつり」に参加いただきました。このプラットフォームは市内の大学、短期大学12校が連携して、産業界、行政との協働を図ろうというものです。70周年記念事業として、「大賀ハスまつり」で学生たちの企画によるモザイクアートを作成するため、素材となるぬり絵募集のテントを出しました。今後も学生の皆さんとの連携を強化し、オオガハスを通じて市への愛着を持てるような企画を若い方の発想で考えていただきたいと思っております。

千葉市の小学校での取組みもあり、平成29（2017）年度から市内の小学校にオオガハスの分

根を始めております。令和３（2021）年度末時点で37校に分根が広がっており、小学生からオオガハスに触れる機会を増やすことで、オオガハスをつないでいく人材を広げていきたいと思います。

平成 30（2018）年度から「ハス守さん」養成講座を始めました。オオガハスの由来、名所案内、生態、管理、栽培実習などの基本的な知識を身に付け、広げていただく取組みです。今年で５回目を迎え、専門知識を持つ方をさらに増やしていきたいと思っております。

今日ここにお集りの皆さんは、オオガハスがなければ顔を合わせることはなかったことでしょう。70年間で素晴らしいネットワークが市内外、国内外に広がっています。そのネットワークを活かして、さらに千葉市発の取組みを磨いていく必要があります。

一つ目は、オオガハスのコンパクトな拠点づくりです。ハス守さん養成講座修了生にもご協力いただきながら、身近な生活の中でオオガハスを感じられる場所を市内に作っていきたいと考えております。

二つ目が、オオガハスゆかりの都市との交流です。先ほど阪本さんのお話にありましたオオガハス見本園には全く同感でありますので、関係都市とも相談させていただき、これまで培ってきたネットワークを強化していきたいと思います。また、オオガハスの観賞地、大賀博士の足跡をたどれるような取組みをしてはどうかとも考えております。

三つ目は、オオガハスの魅力を幅広く発信するプランを改めて作りたいと思っております。千葉市では、さまざまなバックグラウンドの方がオオガハスを通じて一緒に活動している現実があり、オオガハスにはきっと人を結びつける、魅了する何かがあるはずです。そういったものを知っていただいて、千葉市のアイデンティティをさらに確立して千葉市民としての誇りを持っていただく。そんな取組みをしていかなければならないと思っておりますので、今日ここにお集りの皆様に改めてお力添えをお願いしたいと思います。

斉藤　ありがとうございました。開花80周年に向けた三つの取組みのご提案は、ぜひ実現に向けて、市民の皆様と共に推進していただければと思います。オオガハスを守り、育て、未来につなげていくため、行政、市民、産業、教育、研究など多様な主体が連携と協働を深め、今後もさまざまな取組みを続けられることを期待し、終了させていただきます。皆様ありがとうございました。

記念パネル展　大賀ハス70年の歩み

大賀ハス開花70周年を記念して「オオガハスの発掘・開花・普及」や「千葉市におけるオオガハスの取り組み」などを紹介する企画パネル展を開催しました。

［テーマ］大賀ハス70年の歩み
［展示数］A2パネル52点
［期　間］令和4（2022）年6月6日～28日
［場　所］千葉市生涯学習センター1階アトリウム
［主　催］大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会

パネル展の全景

千葉市におけるオオガハスの取り組み1

オオガハスの発掘

千葉市におけるオオガハスの取り組み2

オオガハスの開花～命名～普及

花の鑑賞、花ハスの種類

認証事業 ※申請順

①団体名　代表者名　②目的　③内容

大賀ハス開花70周年記念事業の一環として、主に「オオガハスの魅力発信」などをテーマに、主体的に取り込む団体を大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会が認証し、支援する事業である。

1. 夏休み子ども教室「大賀ハスの工作とステップアート」

①花園公民館
　代表者　佐久間 泰（花見川公民館 館長）
②大賀ハス開花70周年を記念して、オオガハスに関連する制作活動や、館内にステップアート制作を通して、地域の子供たちのオオガハスへの関心をさらに高める。
③花園公民館の夏休み教室の一環として、館内の階段を利用したステップアート（階段ラッピング）制作を地域の小学生と行った。また、小学生を対象としたオオガハスの果托等を使った飾り制作も実施した。

2. 大型絵本「2000年の種」制作と読み聞かせ

①手づくり絵本の会　代表者　森 淳
②オオガハス開花の喜びを子供たちに伝えたい。
③オオガハスの大型絵本を創作及び製本し、千葉公園内の蓮華亭等、市の施設で子供たちに読み聞かせを行った。

3. オオガハスの魅力を伝える「悠久の花」のCD作成

①HASCOM　代表者　日野 達弥
②オオガハスの魅力を伝える楽曲「悠久の花」のCDを作製及び配布し、オオガハスの歴史的・文化的価値への理解促進の一助を担う。
③（ア）悠久の花のCDをスタジオ録音にて作製する。
（イ）オオガハスの保存活動などを行う行政や諸団体及びライブコンサート等での希望者に無料配布し、当該団体でのイベント等でBGMなどとして活用している。

「悠久の花」作者イダセイコさん

4. オオガハス文化伝承事業

①大賀ハスのふるさとの会　代表者　金子 建一郎
②花見川区東大旧緑地植物実験所、ハス品種見本園の一般公開
③地域の貴重な自然であり、千葉市の財産でもある東大旧緑地植物実験所のハス圃場の管理と観賞環境の管理・保全に活用した。

5. 大賀ハス開花70周年記念　のぼり旗作製

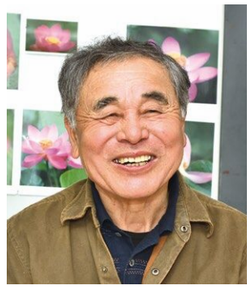
①花びと会ちば　代表者　仙波 慶子
②大賀ハス開花70周年を多くの市民に周知するとともに、市の花としての認知啓発を促す。
③千葉公園で行われる「大賀ハスまつり」等のイベント実施時に、当該のぼり旗を掲出し、雰囲気の醸成として活用した。

6. ぬり絵で参加 70周年記念モザイクアート

①ちば産学官連携プラットフォーム
　会長　山口 光治　（淑徳大学 学長）
②若年世代間での「大賀ハス開花70周年記念事業」の機運を醸成する活動を展開する。千葉市の都市アイデンティティのひとつである「オオガハス」の普及と啓発を行う。
③-1　12の大学・短期大学が参画しているプラットフォーム内でワーキンググループ（幹事校：千葉経済大学・千葉経済大学短期大学部）を設置し、学生ワークショップ（計5回）を実施した。
③-2　学生ワークショップに参加した大学生・短大生により、大賀ハスまつりなどで集めた「ちはなちゃん」のぬり絵（511枚）を使ったフォトモザイクアートを企画・製作し、「ちはなちゃんのお誕生日会」（千葉公園蓮華亭）、JR千葉駅改札内（ペリエ千葉）で展示を行った。

特 | 別 | 寄 | 稿 | ～開花70周年に寄せて 1

神秘さに魅せられ半世紀
～オオガハスの系統保存に努める



蓮文化研究会顧問　南 定雄

私は鹿児島県の農業高校を卒業して、昭和39(1964)年4月に検見川の東京大学農学部付属園芸実験所(後の緑地植物実験所)に技術職員として就職しました。実験所に着くやいなやオオガハス発掘記念碑の建設計画が持ち上がり、ハスもその近くに植えようということで、最初の仕事はオオガハスの種蓮根を池に植えることでした。それがオオガハスとの初めての出会いであり、それまでオオガハスのことは全く知りませんでした。

そもそも、昭和26(1951)年に大賀一郎先生が東京大学検見川厚生農場（現在の検見川総合運動場）で発掘したオオガハスの種が発芽して、分根されて農場に戻ってきたのですが、その時は近くの畑町におられた伊原茂さんの所で咲いたのです。つまり、発掘されてから13年間、総合運動場の中にオオガハスはなかったわけです。そこで、オオガハス発掘記念碑の建設に合わせて、発祥の地にオオガハスを植えるべきだと当時の関係者の方が思われたのです。たまたま昭和39(1964)年は東京オリンピック開催の年で、クロスカントリー競技が総合運動場で行われるということもあり、世界の方々に記念碑とハスの花を見てもらおうと地元が盛り上がり、記念碑の建設計画が始まったと後になって聞きました。

大賀先生のことは鹿児島にいる頃は存じ上げませんでしたが、記念碑を作るということで３～４回、ご自宅のある府中市から農場にいらっしゃいました。体が大きくて、写真の通りの方でした。私はまだ実験所に入ったばかりで、直接ハスについて先生にお聞きすることはできませんでしたが、傍に座らせていただいて、先輩方と話をされている様子を伺っていました。

種蓮根は、千葉公園と大賀先生のご自宅から持ち込まれました。昔のことなのであまり覚えていませんが、結構池が広かったので、20～30本はあったかと思います。私と先輩技官と二人で3月の終わりくらいに植えて、池なので特に手入れをする必要はなく、７月初めくらいに咲きました。40～50年くらい前は今ほど暖かくないので、開花が遅かったのです。初めて植えた場所なのに、順調に育ってよく咲きました。今の千葉公園と同じくらいにいっぱい咲いていました。私はこの時に初めてオオガハスを見たのですが、素晴らしいなと思いました。神秘的な花だということは本で読んで知っていましたが、実際に見て本当に感動しました。それから何年かは咲いていたはずです。

オリンピックの時は、それはすごかったです。見たい方はどうぞということで山刈りをしました。クロスカントリーだから走って回るのですが、私どもはグラウンドの中で見せてもらいました。入れない人は山の縁から見ていたほど、すごい数の人が来たと思います。壊れたアーチとか、オリンピックの名残が何十年もありました。

私は、本職では学生の実習を担当していましたが、一番若手だったのでハスの管理もずっと行っていました。記念碑が完成した1年後の昭和40(1965)年6月に大賀先生が亡くなり、その翌年の春先から先生が収集されていたオオガハスや日本古来の和蓮といった品種を、神代植物公園、東大園芸実験所、府中公園の3カ所で、保存のために分けて栽培するようにしたのです。最初は20種類くらいでした。当時は国内でもあまりハスの交流がなく、どこにどんなハスがあるかも全然分からなかったのです。

それから本格的にハスの収集と栽培を始めました。まず、先輩と私の他、何人かで実験所にビニールで蓮池を作りました。しかし、ハスの根がビニールを突き破ってしまうことが分かったので、コンクリート製の栽培池を大学に作ってもらいました。まだ国交がない時代に、何度も中国にも行ってハスを集めてきました。最初は、実験所の人たちもハスにあまり関心がなく、せっかく集めても「何をやっているんだ」くらいの冷ややかな感じでした。20歳くらいから始めて、もう75歳ですから、半世紀以上もハスばかりやっています。

オオガハスは今、いろいろな所に分根されていますが、交配しないよう一般の方には分けず、公共施設を中心に分根しています。自分たちだけで持っていたのではだめで、多くの人に見ていただかなければハスは広がりません。

全国に分根したり、分根先からいただいたりといった双方向の交流があります。大賀先生も新潟をはじめあちらこちらに持って行かれていました。しかし、交雑が進んでしまった所が何か所かあります。府中市もそうでした。市民から、これは大賀先生のハスとは違うんじゃないかという苦情がたくさん来て、東大緑地植物実験所からオリジナルを分けてほしいということになり、分根しました。品種の系統保存はとても大事なことです。

千葉市でもオオガハスを系統保存しようということで、私がその指導を行っています。また市では、平成30(2018)年から「ハス守さん養成講座」を開催しており、オオガハスの栽培講習も行っています。毎年10人ほどオオガハスを守り育て伝えるボランティアを養成しています。以前から、そうした活動を通して市民の方々がハスに関心を持ってくれるようになれば、と思っていましたので、できるだけ協力しています。ただお祭りをやるだけではなくて、市民の中にオオガハスについて詳しい人が必要です。

私は今、「大賀ハスのふるさとの会」の顧問もしていますが、この会も市民によって設立されたと聞いています。東大緑地植物実験所では、ハスの見本園を年に一度地域に開放して、「観蓮会」を開いていました。東大と協力してお茶室を作ったりしました。ところが、平成24(2012)年、それまで田無市（現在の西東京市）にある東大生態調和農学機構（東大農場）が検見川に来るということで進んでいた話が、

急に逆転して検見川の実験所が田無市へ行くということになってしまいました。せっかく今まで毎年200～300種類もあるハスを見ることができていたのに、それが見られなくなる。オオガハスは千葉市の花だし、それはおかしいのではないかということで、地域のために「大賀ハスのふるさとの会」が立ち上がりました。

私は顧問として、ハスの管理方法などを指導しています。見本園は、私が重機を持ってきて土の入れ替えを行い、会のメンバーがごみ取りや植え替え、肥料やりなどを行っています。本当はもっと千葉市に援助していただいて、業者に手入れをしてもらえるといいのですが。見本園では世界中のハスを栽培していて、実験所の移転後も、ふるさとの会が毎年７月に見本園を一般開放し、「花園ハス祭りの観蓮会」を継続しています。

花ハスの栽培には次のような考え方があります。

湖や池の岸辺でも生育していますが、そういう場所は自然体です。難しいのは 1,000㎡以下の池や 50㎡ぐらいの栽培地そして桶栽培などです。これらは定期的に植替えをしなければ病気になり枯れてしまいます。花ハス品種は大型、中型から小型の品種があります。近年各地の公園でも展示されています。花ハスの愛好家は小型のハスを庭で栽培し花を咲かせ楽しんでいます。

千葉公園のオオガハスの手入れの指導も平成６(1994)年蓮華亭が造営されたころから行っています。千葉公園では、開花が終わった後の果托の切り取りも早めに行い、種子からの発芽をふせいでいます。展示池を３つに分けて、３年に１回の割合で植替をしていて、オオガハスの花が毎年観られるように丁寧な管理と育成がなされています。

開花最盛期には400本以上の花を見ることが出来ます。千葉公園は栽培面積や栽培条件が良く、また栽培技術の向上等でオオガハスの開花数が年々多くなっています。開花期には早期から大勢の人々が集い市民の憩いの場となっています。

※千葉市オーラルヒストリー「大賀ハス～南定雄氏インタビュー～編」（令和3(2021)年3月31日発行）を再編集

系統保存について指導する南定雄氏

特別寄稿 ～開花70周年に寄せて 2

父と大賀ハス その後

和歌山大賀ハス保存会　阪本 尚生

今から35年前の昭和62(1987)年、ちょうどオオガハスが開花して 35 年目の年に千葉市立郷土博物館で特別展「よみがえらせた世界最古の生命、千葉の大賀ハス展」が開催され、オオガハスに関係のある方が招かれ、私と私の母もご招待いただきました。千葉市を訪れるのはその時が初めてで、発掘地点や郷土博物館の展示を感慨深く見学させていただいたことを憶えています。その年度末に千葉市郷土博物館から「大賀ハス」という冊子が刊行されました。監修は吉田公平氏、編集・発行は郷土博物館になっています。その冊子に、吉田公平氏（当時千葉市文化財保護審議会副会長）の依頼を受け『父と大賀ハス』という拙文を寄稿させていただいています。今回、開花 70 周年記念フォーラムまでを辿ってみたいと思います。

当時私は 32 歳、中学校の教員として駆け出しの頃でした。父親が亡くなって８年目で少々

昭和62(1987)年に千葉市立郷土博物館で開催された「千葉の大賀ハス展」にて(右端が阪本尚生氏)

落ち着きを取り戻しているころでした。そこへ吉田氏から千葉で大賀ハス展が開かれるので、協力いただきたいとの要請がありました。オオガハスや大賀博士は我が家にとって特別で、その資料もいくぶんか家に残されていたので、依頼を快諾して大賀博士自筆の墨書や資料30点あまりをお貸ししました。その際に父の阪本祐二について何か一文を寄せてほしいとの依頼があり、私が『父と大賀ハス』というタイトルで作文させていただくことになりました。

若干30を過ぎたばかりで、指導困難校で奮闘の日々でしたのでハスについては、まだ勉強不足でしたが、真偽論争資料は残っていたので、それをテーマにして執筆を始めました。当時はまだワープロが高価で手持ちになく、鉛筆書きで原稿用紙のマス目を埋めていったのを覚えています。稿の末尾に昭和62(1987)年1月23日と記されているところから、おそらく年末の休日を利用して書き始めてほぼ一月かけて書き上げました。自分の書いた文章を読むのは照れがあって今の今まで読むことはありませんでしたが、今回再読してみて、やはり若いせいか少々感傷的にはなっているものの、手前味噌ながら真偽論争の概要をコンパクトにまとめていると思います。今後再編集してみたいと思っています。

これを機にオオガハスへの関心を深め、和歌山大賀ハス保存会の副会長にも就き、仕事の合間を縫ってオオガハスの勉強を始めましたが、当時インターネット環境はなく、情報を集める手段がありませんでした。

平成12(2000)年を過ぎた頃から、インターネット環境が整い、東京の蓮文化研究会がHPを立ち上げ、そこに電子掲示板が設けられていたので、いろいろ書き込みしているうちに今につながる知り合いができ、人やネットからハスの情報が入るようになりました。オオガハス擬きの記事が東京朝日新聞に載ったのもちょうどその頃でした。オオガハス擬きは、今も広がりはすれ収束する気配は見えません。本家本元の千葉市が解決の妙案を打ち出してくださると期待しています。

オオガハスの真偽性については、昭和57(1982)年にネイチャー誌上にオランダの農業大学のPriestly博士らが、フランテン産の中国古代蓮が300年から400年ほどであるとの論文が掲載され、また平成7(1995)年にはカリフォルニア大学のJane Shen-Miller博士が1350±220年であることをAmerican Journal of Botany誌上に発表をしており、ハスの長寿性を示す学術論文が出てオオガハスの信憑性を傍らで強化していました。しかし平成10(1998)年、遺伝学雑誌に東大放射線遺伝学研究室の金沢章氏らのグループのミトコンドリアDNAを使ってハスの系統関係を示す論文が掲載されました。この論文で中国古代蓮とオオガハスが近縁であることが示されました。また平成16(2004)年に私の母校の鳥取大学大学院に中国から黄氏という留学生が来て内外のハス品種をDNAで分類したと恩師から連絡を受け、会いに行ったところ、やはりオオガハスは中国のハスと遺伝的に近い位置にある、との結果を得ているとのことでした。この件に関してはまた稿を改めたいと思います。

平成24(2012)年に開かれた京都花蓮研究会の総会で京都府立大学久保中央教授による「巨椋池系花蓮品種のDNA鑑定と類縁関係」というテーマの講演があり、巨椋池を中心とする220系統の類縁関係が示され、オオガハスの位置は在来種とは違う独特の位置にはあるものの、保存地でわずかな違いが出ていることが示されました。それぞれの株は外見上見分けがつきません。長年池で栽培してきたため自殖による種子株に置き換わった可能性を示唆します。

平成27(2015)年頃から熊谷俊人前市長のもと千葉市まちづくり未来研究所が立ち上げられ、平成28(2016)年大賀ハスが千葉市都市アイデンティティを形成する4つの地域資源の一つに位置づけられ、官民挙げての取り組みがはじまり、平成29(2017)年に大賀ハスシンポジウムが開催され、基調講演をさせていただくという光栄をいただきました。その5年後が今回の大賀ハス開花70年記念フォーラムに繋がりました。その間のオオガハスの市民への定着は、大賀ハスまつりの隆盛でよくわかります。

以上、開花35年から開花70年までをざっと振り返りました。オオガハスについても最新科学のメスが入ってより詳しくわかるようになってきています。その知見を元に、今後の保存活動に活かしていっていただきたいと思っています。

オオガハスの千葉市民への受け入れは発見当初は大きな盛り上がりを見せましたが、真偽論争のダメージを受けて萎んでいたところに、開花35年の年に「千葉の大賀ハス展」が開催され再び盛り上がりを見せました。今回の開花70年記念フォーラムは、先の「千葉の大賀ハス展」に参加した者から見れば、はるかに大きく進展しているように思えます。これを契機にオオガハスが千葉市民へより広く深く浸透し、千葉市民の確かなアイデンティティとなることを願っています。

平成29(2017)年に開催された大賀ハスシンポジウムでの基調講演

■全国オオガハス生育場所一覧 R４．４．１現在

※H27年度に実施した生育場所調査を基にその後分根先を追記し、整理したもの

	施設名	植栽場所	所在地
1	北見市小泉　いこいの里ココカラ	鏡沼、蓮池	北海道北見市小泉 896 － 1　市田　信一
2	弘前市弘前公園		青森県弘前市大字下白銀町１－１
3	対泉院・貴福池		青森県八戸市新井田字寺ノ上 13 － 1
4	称名寺	前　ため池	宮城県亘理郡亘理町旭山１
5	千秋公園	秋田久保田城跡	秋田県秋田市千秋公園
6	大池公園		福島県西白河郡矢吹町大池 64
7	御薬園		福島県会津若松市花春町８－１
8	願成寺阿弥陀堂	浄土庭園	福島県いわき市内郷白水町広畑 219
9	龍興寺		福島県大沼郡会津美里町龍興寺北甲 2222 － 3
10	法蔵寺		福島県田村郡三春町字荒町 169
11	矢吹町役場	大池公園	福島県西白河郡矢吹町
12	常陸風土記の丘		茨城県石岡市染谷 1646
13	古河総合公園	蓮池	茨城県古河市鴻巣 399 － 1
14	霞ヶ浦総合公園		茨城県土浦市大岩田町 1051
15	妙徳寺	池は 1036㎡	栃木県大田原市小滝 1607-1
16	栃木県立さくら清修高等学校	校庭の池	栃木県さくら市氏家 2807
17	東輪寺		栃木県さくら市鹿子畑 1117
18	つがの里		栃木県栃木市都賀町臼久保 325
19	神生館		栃木県那須郡那珂川町馬頭町和見 319
20	長林寺		栃木県足利市山川町 1142
21	天平の丘公園	第一、第二池	栃木県下野市国分寺 993 － 1
22	群馬県立館林高等学校		群馬県館林市富士原町 1241
23	高山村立高山中学校		群馬県吾妻郡高山村中山 3750 － 1
24	岩宿の里		群馬県みどり市大間々 235 － 6
25	高原千葉村		群馬県利根郡みなかみ町相俣 2325
26	吉井いしぶみの里公園	池は約 50㎡	群馬県多野郡吉井町大字池 1085
27	紫雲山地蔵寺		埼玉県秩父郡小鹿野町飯田 2174
28	所沢市立明峰小学校		埼玉県所沢市有楽町 26 － 20
29	古代蓮の里	世界の蓮の展示池、古代蓮会館にもレプリカ展示	埼玉県行田市大字小針 2375 番地 1
30	善長治	放生池	埼玉県川越市豊田本 939
31	千葉公園		千葉県千葉市中央区弁天３－１－１
32	生実池		千葉県千葉市中央区生実町 931 － 1
33	千葉市立生浜東小学校		千葉県千葉市中央区生実町 1928
34	千葉市立郷土博物館	プランター栽培２基	千葉県千葉市中央区亥鼻 1-6-1
35	ＮＨＫ千葉放送局	プランター栽培３基	千葉県千葉市中央区千葉港 5-1
36	福寿院		千葉県千葉市中央区川戸町 694
37	宗教法人　東光寺別院		千葉県千葉市中央区祐光４－８－８
38	東京大学付属緑地植物実験所		千葉県千葉市花見川区畑町 1051
39	しらさぎ公園		千葉県千葉市花見川区瑞穂１－４
40	花園公民館		千葉県千葉市花見川区花園３－ 12 －８
41	千葉市立花見川第三小学校		千葉県千葉市花見川区花見川１－１
42	千葉市立園生小学校		千葉県千葉市稲毛区小仲台９－ 30 －１
43	千葉大学		千葉県千葉市稲毛区弥生町１－ 33
44	堂谷津の里（バランス２１）	水田の一部	千葉県千葉市若葉区谷当町
45	東京クラシッククラブ	ゴルフ場池	千葉県千葉市若葉区和泉町
46	冨田都市農業交流センター	原田池	千葉県千葉市若葉区富田町 711 －１
47	中田やつ耕園		千葉県千葉市若葉区中田町
48	千葉市立白井小学校		千葉県千葉市若葉区野呂町 215
49	泉地区パブリックゴルフ場		千葉県千葉市若葉区下田町 1005
50	加曽利公民館		千葉県千葉市若葉区加曽利町 892 －６
51	千葉市平和公園		千葉県千葉市若葉区多部田町 1492-2
52	おゆみ野せせらぎの会	四季の道	千葉県千葉市緑区おゆみ野中央
53	緑公園緑地事務所（昭和の森）	玄関前に設置された水鉢	千葉県千葉市緑区土気町２２
54	県立幕張海浜公園　見浜園	蓮池	千葉県千葉市美浜区ひび野２－ 116
55	千葉市立稲毛第二小学校		千葉県千葉市美浜区稲毛海岸５－１－７
56	手づくり公園まさご	公園内池	千葉県千葉市美浜区真砂 5-21
57	千葉県立中央博物館大利根分館	自然観察園	千葉県香取市佐原 4500
58	野田市関宿総合公園	夕日ヶ池	千葉県野田市平井 401
59	手賀の丘公園		千葉県柏市片山 275
60	柏市あけぼの山農業公園	池	千葉県柏市布施 2005-2
61	東金市役所	八鶴湖	千葉県東金市八鶴湖
62	習志野市役所	市役所前庭	千葉県習志野市津田沼５－ 12 －４
63	習志野市立鷺沼小学校	校内観察池	千葉県習志野市鷺沼３－１－１
64	水郷佐原水生植物園		千葉県香取市扇島 1837 － 2
65	成田市立久住第一小学校		千葉県成田市久住中央３－ 12 －１
66	坂田ケ池総合公園		千葉県成田市大竹 1450
67	成田国際空港	蓮の和風庭園	千葉県成田市古込１－１　成田国際空港第１ターミナル前
68	ＴＪＫ成田ビューゴルフコース		千葉県成田市大竹 1450
69	成田市いずみ聖地公園管理組合	成田市いずみ聖地公園	千葉県成田市東和泉 655
70	グリーンポート　エコ・アグリパーク		千葉県山武郡芝山町岩山地内
71	龍教寺		千葉県茂原市本納 3458
72	NPO かずさ		千葉県君津市久留里
73	佐倉ふるさと広場		千葉県佐倉市海隣寺町 97
74	DIC 川村記念美術館		千葉県佐倉市坂戸 631
75	東海大学付属市原望洋高等学校		千葉県市原市能満 1531
76	市原市立海上小学校		千葉県市原市神代 125
77	ライオン株式会社千葉工場	ビオトープ池	千葉県市原市八幡海岸通 74 － 13
78	稲村城　稲の里体験倶楽部	ホタル放流池	千葉県館山市二子 118
79	大賀ハスの里		千葉県鴨川市北小町 183
80	花野辺の里		千葉県勝浦市串浜 1830
81	ムクロジ自然の里	水田の一部	千葉県四街道市
82	善心寺		東京都文京区大塚５－２－７
83	東京国立博物館		東京都台東区上野公園 13 －９
84	水元公園		東京都葛飾区水元公園３－２
85	宗教法人　東福寺		東京都渋谷区渋谷３－５－８
86	府中市郷土の森公園	修景池	東京都府中市矢崎町５－５
87	雲乗山地蔵院　圓林寺		東京都町田市相原町 3729
88	町田市大賀藕絲館		東京都町田市下小山田町 3267
89	薬師池公園	四季彩の杜　薬師池	東京都町田市野津田町 3270
90	広福寺		東京都昭島市福島町２－ 14 －７
91	東京大学　生態調和農学機構　ハス見本園		東京都西東京市緑町１－１－１
92	根ねがらみ前水田		東京都羽村市緑ヶ丘５－２－１
93	真蔵院		東京都小金井市関野町２－８－４
94	創価大学	文学の池	東京都八王子市丹木町１－ 236
95	関東学院大学		神奈川県横浜市金沢区六浦東１－ 50 －１
96	こどもの国		神奈川県横浜市青葉区奈良町 700
97	みその公園		神奈川県横浜市鶴見区獅子ヶ谷３－ 10 －２
98	光則寺		神奈川県鎌倉市長谷３－９－７
99	神奈川県立フラワーセンター大船植物園		神奈川県鎌倉市岡本 1017
100	小田原城址公園		神奈川県小田原市城内
101	特別養護老人ホーム中之島		新潟県長岡市中之島字古新田 2105 －６
102	十日町市弁天池		新潟県十日町市二ツ屋
103	本陽寺		富山県富山市梅沢町２－６－ 19
104	富山県自然博物園ねいの里		富山県富山市婦中町吉住１－１
105	越前町立福井総合植物園プラントピア		福井県丹生郡越前町朝日 17 －３－１
106	花はす公園		福井県南条郡南越前町中小屋
107	山梨県立農林高等学校	バイオ順化温室内水鉢	山梨県甲斐市西八幡 4533
108	長野市立篠ノ井東中学校		長野県長野市篠ノ井小森 840
109	長野市立湯谷小学校	池	長野市立湯谷
110	善光寺	三門南大勧進放生池	長野県長野市大字長野元善町 491 ーイ
111	稲泉寺		長野県下高井郡木島平村大字穂高 858
112	井戸尻史跡公園		長野県諏訪郡富士見町境 7053
113	大賀ハス園		岐阜県羽島市桑原町前野
114	誓願寺		静岡県静岡市駿河区丸子 5807
115	富士霊園		静岡県駿東郡小山町大御神 888 － 2
116	文化財展示館		静岡県長泉町下土狩 1283 － 11
117	真砂館		静岡県掛川市倉真 5421
118	代通寺		静岡県富士市大淵 2132
119	河西庭園	産婦人科内池	静岡県三島市

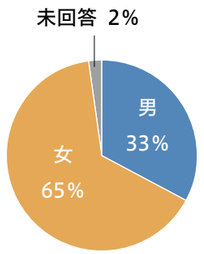
	施設名	植栽場所	所在地
120	特別養護老人ホーム　希望の郷		愛知県名古屋市港区新茶屋２－1501
121	わかば幼稚園		愛知県名古屋市千種区猫洞通２－13
122	行徳寺		愛知県豊田市室町３－68
123	さくら総合病院　有料老人ホーム　太郎と花子		愛知県丹羽郡大口町新宮１－10
124	弘誓院		愛知県知多郡阿久比町大字卯坂字仙人坊 79
125	三ツ又ふれあい公園		愛知県春日井市東野町西１丁目
126	白圭山蓮蔵寺		三重県津市戸木町 2078
127	滋賀県立湖南農業高等学校		滋賀県草津市草津町 1839
128	弥生の森歴史公園		滋賀県野洲市辻町 57－1
129	草津市立水生植物公園みずの森		滋賀県草津市下物町 1091
130	琵琶湖烏丸半島蓮群生地		滋賀県草津市下物町
131	誓光寺		滋賀県甲賀郡信楽町上朝宮 1505
132	金戒光明寺		京都府京都市左京区黒谷町 121
133	京都府立植物園		京都府京都市左京区下鴨半木町
134	南禅寺		京都府京都市左京区南禅寺福地町
135	禅林寺		京都府京都市左京区永観堂町 48
136	西芳寺		京都府京都市西京区松尾神ケ谷町 56
137	京都市青少年科学センター	屋外園に設置の桶	京都府京都市伏見区深草池ノ内町 13
138	法金剛院		京都府京都市右京区花園扇野町 49
139	三室戸寺		京都府宇治市菟道滋賀谷 21
140	福徳寺		京都府北桑田郡京北町下中寺ノ下 15
141	咲くやこの花館		大阪府大阪市鶴見区緑地公園２－163
142	大阪市立長居植物園		大阪府大阪市東住吉区長居公園１－23
143	大阪市（公財）堺市公園協会	堺市都市緑化センター	大阪市堺市
144	万博記念公園	日本庭園	大阪府吹田市千里万博公園１－１
145	龍雲寺		大阪府富田林市加太２－11－19
146	姫路城西御屋敷跡庭園 好古園		兵庫県姫路市本町６８
147	三田市立つつじが丘小学校		兵庫県三田市つつじが丘南３－829－１
148	本福寺	水御堂	兵庫県淡路市東浦町浦 1310
149	善祥寺白蓮華園		兵庫県三木市口吉川町善祥寺 27－１
150	芦屋市立西浜公園		兵庫県芦屋市潮見町
151	春日大社　萬葉植物園		奈良県奈良市春日町 160
152	喜光寺		奈良県奈良市菅原町 508
153	大賀池		和歌山県日高郡美浜町三尾
154	和歌山県植物公園　緑花センター		和歌山県岩出市東坂本 672
155	伯耆古代の丘公園		鳥取県米子市淀江町福岡 1529
156	湖山池公園		鳥取県鳥取市桂見ほか地内
157	縄文の森公園		島根県大田市三瓶町多根口 58－２
158	荒神谷史跡公園		島根県出雲市大社町修理免 735－５
159	後楽園		岡山県岡山市北区後楽園１－５
160	庭瀬城		岡山県岡山市 北区庭瀬 828
161	広島平和記念資料館	平和の鐘周囲の池	広島県広島市中区中島町１－２
162	周南緑地（西緑地）		山口県周南市徳山地内
163	長登銅山跡 大仏ミュージアム		山口県美祢市美東町長登 610
164	源久寺		山口県山口市仁保下郷土井 2910－１
165	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム		山口県下関市豊北町大字神田上 891－８
166	島田島		徳島県鳴門市瀬戸町大島田５－１
167	総本山善通寺	御影堂池・仁王門前の壕	香川県善通寺市
168	四国村		香川県高松市屋島中町 91
169	浄瑠璃公園		香川県松山市浄瑠璃町甲 1040－４
170	高知県立牧野植物園		高知県高知市五台山 4200－６
171	定福寺	土佐豊永万葉植物園	高知県長岡郡大豊町粟生 158
172	熊本国府高等学校		熊本県熊本市中央区国府２－15－１
173	鹿央古代の森・鹿央物産館		熊本県山鹿市鹿央町岩原 2965
174	国宝 臼杵石仏		大分県臼杵市深田
175	宇佐神宮		大分県宇佐市南宇佐 2859
176	稚児ヶ池地区公園		宮崎県西都市三宅地内
177	市立大口小学校		鹿児島県伊佐市大口里 1859
178	鹿児島市都市農業センター	池 1000m²	鹿児島県鹿児島市犬迫町 4705
179	首里城公園		沖縄県那覇市首里金城町１－２

大賀ハス開花70周年記念フォーラム　アンケート集計（総数51人）

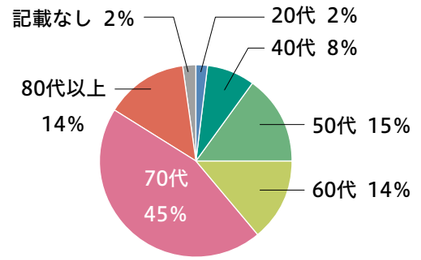
[参加者の性質]

女性の参加率が高く、70 代を中心に中高年の方の参加が目立った。
また、市政だよりでフォーラムについて知った方が多く、市民の参加が 8 割以上を占める形になった。

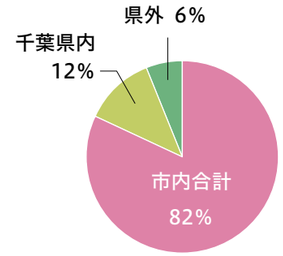
性　別



年　齢



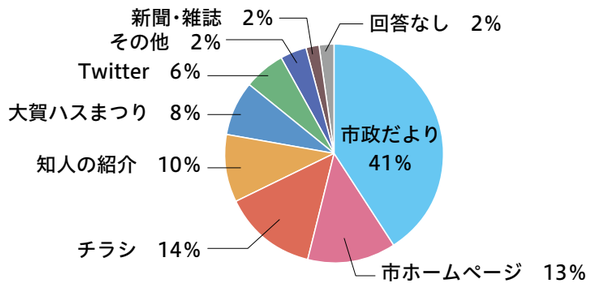
参加者お住まい



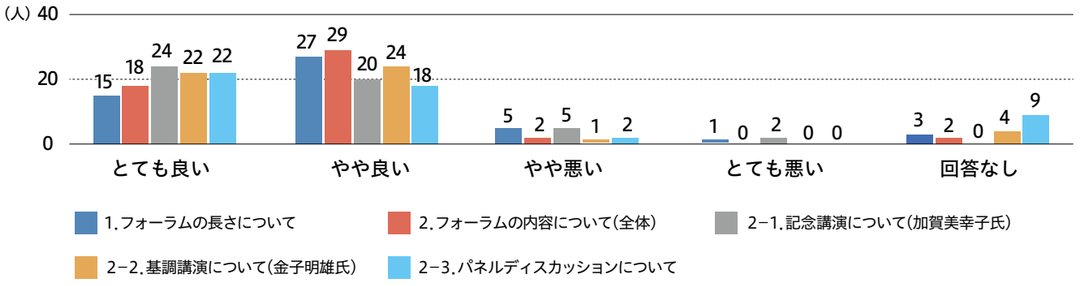
[フォーラムの満足度・感想について]

フォーラムの構成、各講演内容について「とても良い」「やや良い」との回答が多く、全体的な満足度は高い結果となった。

フォーラムを知ったきっかけ（複数回答）



フォーラムの満足度



[開花80周年に向けて]

「純粋なオオガハスを今後も守ってほしい」といった現在の活動を支持する声が多かった。また、「オオガハスに関する作品（写真・俳句など）の披露の場を作ってほしい」など、新たなイベントを求める声もあった。

［ 編集後記 ］

　原稿の執筆や資料の提供など多くの方々のご協力により、無事発行に至り、安堵しました。ご協力くださった皆様に感謝申しあげます。

　開花70周年とは人間でいえば、おめでたい“古希”にあたります。人生にはさまざまな転機が訪れるように、オオガハスにも幾多の試練と変遷がありました。発掘から開花に至る奇跡の物語をたどり、現在につなげ、学術的に貴重な内容も盛り込みました。

　二千年の時を経て、多くの人々に見守られ、今も変わらず、優美な花を咲かせ人を魅了するオオガハスの秘密は何か？この記念誌が、そうした謎解きのヒントになればうれしい限りです。そしてオオガハスの未来につながれば幸いです。

大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会は
花びと会ちば / 蓮文化研究会 / 大賀ハスのふるさとの会 /
千葉商工会議所女性会 / ちば産学官連携プラットフォーム /
公益社団法人千葉市観光協会 / 千葉市
で構成されました。

大賀ハス開花70周年記念誌

発行日／令和5（2023）年3月31日

発行者／大賀ハス開花70周年記念事業実行委員会
千葉市中央区千葉港 1-1

連絡先／千葉市都市局公園緑地部緑政課
電話 043(245)5775

制　作／有限会社 文明舎